

群馬県歴史の道調査報告書第十四集

歴史の道調査報告書

日光への脇往還

群馬県教育委員会

日光への脇往還

序

群馬県は古代より、常にわが国の主要幹線道を要し、交通史上重要な役割を果たしてまいりました。

つまり、古代における東山道、中世の鎌倉街道、近世の中山道を始めとする諸街道であり、これらは、群馬県に新しい文化をもたらせ、あるいは県内の文化を他国へも波及させ、群馬県に各時代の文化の華をさかせ、今日の文化県群馬の基礎を築きました。

これら群馬の歴史の道調査は、昭和五十三年度から文化庁より国庫補助を得て五か年計画で実施し、すでに十三街道の調査を完了し、その成果を報告書にまとめてまいりました。本年度は調査の最終年度として、古代・中世の幹線路である東山道・鎌倉街道、そして、近世の湯治・参詣道としての吾妻の諸街道・日光への脇往還の四街道の調査を実施しました。

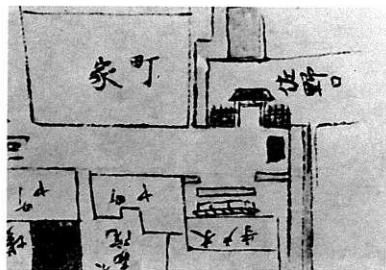
各街道の調査は、種々の困難性が伴いましたが、調査員の方々の献身的な御努力により、本年度の調査も完了し、ここにその成果を集約した本報告書を刊行することができました。

この報告書が県民のみならず広く読まれ親しまれるとともに、今後の歴史の道の保存整備資料として、各地で活用していただきたいと思っております。

末筆ではありますが、御多忙の中を調査してくださいました調査員の方々、また、調査に御協力いただいた方々、並びに関係市町村教育委員会に心より感謝申し上げます。

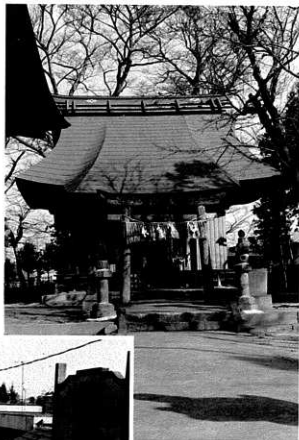
昭和五十八年三月三十日

群馬県教育委員会教育長 横山 巖



館林城下絵図
(佐野口付近)

筑井町 近戸神社



旧大胡宿



大胡町 養村寺の山門



鼻毛石の庚申塔群



旧室沢宿

粕川村から新里村に入る大胡道



新里村板橋 赤城の百足鳥居



島古井 天満宮入口の馬頭観音

目次

序 群馬県教育委員会教育長 横山 巖

I 歴史の道調査実施要項

I 日光への脇往還の概観

- 一、日光への道……………3
 - 二、日光脇往還(館林道)……………4
 - 1 脇往還の経路……………4
 - 2 家康の遺書を迎える道……………4
 - 3 川俣関所と川俣宿……………5
 - 4 下早川田の渡し……………6
 - 5 ここを旅した人々……………7
 - 三、日光裏街道(大胡道)……………8
 - 四、根利道(大間々道)……………9
 - 五、群馬県内の東照宮について……………10
- II 道の確定
- 一、道の確定……………12
 - 日光脇往還……………12
 - 1 川俣宿から館林城下へ……………12
 - 2 館林城下から下早川田へ……………13
 - 日光裏街道……………13
 - 1 五科宿から駒形宿へ……………13
 - 2 駒形宿から大胡宿へ……………15

III

日光への脇往還の現状と文化財

- 一、日光脇往還……………30
 - 1 川俣宿から館林城下へ……………30
 - 2 館林城下から下早川田へ……………36
 - 二、沿線地 園……………22
 - 4 柏山集落から上神梅集落へ……………20
 - 3 寒戸集落から柏山集落へ……………20
 - 2 根利集落から寒戸集落へ……………19
 - 1 大原宿から根利集落へ……………18
 - 根利道……………18
 - 4 室沢宿から神梅宿へ……………17
 - 3 大胡宿から室沢宿へ……………16
 - 三、根利道……………60
 - 1 大原宿から根利集落へ……………60
 - 2 根利集落から寒戸集落へ……………64
 - 3 寒戸集落から柏山集落へ……………66
 - 4 柏山集落から上神梅集落へ……………69
- あとがき

歴史の道調査実施要項

一、目的

古来、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいうべき由緒ある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用を資することを目的とする。

二、調査主体者

群馬県教育委員会

三、調査の方法

(1) 指導 調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

(2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を統括する。

(3) 調査員 県教育委員会事務局管理部文化財保護課長並びに担当職員

丸山 知良 群馬県議会図書室長

石原 純一

群馬県立尾島女子高等学校教諭

荻野 朝則

板倉町教育委員会社会教育主事

原田 雅純

産業考古学会会員

品川 久

群馬県立伊勢崎東高等学校教諭

(4) 調査協力機関

館林市教育委員会

明和村教育委員会

前橋市教育委員会

大胡町教育委員会

柏川村教育委員会

新里村教育委員会

黒保根村教育委員会

利根村教育委員会

玉村町教育委員会

宮城村教育委員会

大間々町教育委員会

(5) 調査方法

○ 一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○ 二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

(6) 調査対象

昭和五十七年度は、日光への脇往還及び他街道とする。

(調査事項)

① 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば 関・番所・一里塚・

宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御仮屋・城館・陣屋・

奉行所・古戦場・会所・並木・石畳・橋梁・隧道・常夜燈・道標・地藏・

道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的な名所（社寺・札所・霊場・温泉・宿坊等・名勝（庭園等）の分布状況と保存の実態。

㊦ 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態

㊧ 道・運河の歴史的意義・格・沿革。

㊨ 河川の歴史の変遷。

㊩ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

㊪ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

四、調査のまとめ

一報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道、運河ごとに分冊として作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

群馬県歴史の道調査報告書

- 第一集 足尾銅山街道
- 第二集 日光例幣使街道
- 第三集 三 国 街 道
- 第四集 沼田・会津街道
- 第五集 信 州 街 道
- 第六集 清水峠越往還
- 第七集 佐渡奉行街道
- 第八集 古戸・桐生道
- 第九集 古 河 往 還

- 第十集 下 仁 田 道
 - 第十一集 中 山 街 道
 - 第十二集 十 石 街 道
 - 第十三集 利 根 川 の 水 運
 - 第十四集 日 光 へ の 脇 往 還
 - 第十五集 吾 妻 の 諸 街 道
 - 第十六集 鎌 倉 街 道
 - 第十七集 東 山 街 道
- 昭和五十三年度～五十七年度

群馬県歴史の道調査事務局

- 元文化財保護課長 磯 貝 福 七
- 前文化財保護課長 関 茂
- 文化財保護課長 森 田 秀 策
- 前文化財保護課参事 白 石 保 三 郎
- 文化財保護課参事 新 藤 俊 雄
- 元文化財保護係長 樋 口 良 夫
- 前文化財保護係長 岸 栄
- 文化財保護係長 岸 栄
- 文化財保護課調査員 奈 良 部 清 満(昭和五十三年、五十四年度担当)
- 文化財保護係調査員 大 井 田 利 興(庶務担当)
- 文化財保護係調査員 近 藤 功
- 文化財保護係調査員 青 木 裕(昭和五十五年、五十六年、五十七年度担当)

I 日光への脇往還の概観

一、日光への道

日光への道は日光東照宮の建立と共に、重要な意味を持つようになった。

古来、日光の地は勝道上人によって開かれた神仏習合の道場として、奈良時代から一つの霊場とされてきたところである。神宮寺、四本龍寺（のち輪王寺となった）、本宮がつくられ、やがて中禅寺が中世における観音信仰の巡礼札所となったことも加わって、一般の信仰者が訪れるようになった。

日光は、こうした聖地とか霊地と考えられてきたところである。そこで江戸幕府は初代将軍徳川家康の没後、一先ず駿河国（静岡県）の久能山に葬ったが、翌年の元和三年（一六一七）に朝廷から東照大権現の神号を贈られると、東照宮を日光山内に造営したのであった。

江戸時代の主要国道としての五街道の一つに日光街道が数えられるのも、幕府の公式行事が施行されるための重要な街道としての指定である。江戸時代から二十一宿（徳次郎宿を三宿に数えるとすれば二十三宿）が日光街道である。実際には宇都宮宿までは奥州街道と一緒に、宇都宮宿から徳次郎（下中・上の三宿）・大沢・今市・鉢石・日光坊中とたどるのである。

日光東照宮が落成した元和三年から、朝廷は奉幣使を日光に派遣した。正保三年（一六四六）からは恒例となり、恒例の奉幣使、即ち例幣使が通行することとなり、例幣使街道と呼ばれるようになった。京都から中山道をたどり、倉賀野宿で分かれて、玉村・五科・芝・木崎・太田宿を通過し、栃木・

鹿沼を経て、今市で日光街道に合流する道である。この上野國関係の日光例幣使街道については、既に『群馬県、歴史の道調査報告書』②を刊行している。

これらの他に本地域内で日光への道として「日光」を冠する道路がいくつか存在し、今度はそれらを取上げ調査した。

一つは「日光脇往還」と称する館林道である。武蔵国忍宿から二里で利根川の川俣関所となり、渡河し、川俣宿から北上して館林城下町を経て早川田で渡良瀬川を渡り、佐野宿に至る。

次いで「日光裏街道」と称する大胡道である。例幣使街道五科宿から利根川を渡り、芝宿で分かれて北上し、駒形宿から大胡、室沢を経て板橋から神梅へ至る。ここで銅山（あかがね）街道に合流する。この銅山街道は足尾銅山の銅の搬出道路であるが、これをさかのぼり足尾宿から細尾峠を越えて日光山内に至るのである。

更には赤城山の北面、根利（現利根郡利根村）からの道で「日光裏街道」と呼ばれている根利道がある。根利から沼田宿へ片品川の左岸をさかのぼり、沼田街道と呼ばれている。根利から赤城山の東側中腹を越える山中の道は利根郡から山田郡大間々宿へ出荷する「まゆ」を中心とする経済道路でもあった。この道は利根郡から日光や古峯が原への信仰道路として日光みち（日光裏街道）を称するが、また大間々道と呼ばれ、大間々近辺からは根利道と呼んだ。大間々へ行くのは鹿角（かすの、黒保根村）を通過して水沼へ、日光へ行くには小中（勢多郡東村）へ出て共に銅山（あかがね）街道に合流する。

現在、利根郡から日光への道として知られる金精峠越えの日光みちには、古くからの山道を明治初年に改修してから利用が多くなったものである。外国人の国内旅行の指定コースとしての整備が明治五年、六年の夏期二回の道路工事により完成した。よって本調査から除くのが順当であろう。

以上、数條の日光みちを総じて「日光の脇往還」と題することとする。

二、日光脇往還(館林道)

1 脇往還の経路

館林城下の往還を日光脇往還と称してきた。館林市立第一資料館所蔵の絵図にも「日光脇往還」と記されている。

武蔵国北埼玉郡新郷村(埼玉県羽生市)から利根川を渡り、邑栗郡川俣・大佐野・矢島・明和村から青柳・小桑原・新宿・谷越・館林・新当郷・大新田・足次・下早川田(館林市)を経て、下野国足利郡下羽田村(栃木県佐野市)に至る道路である。

全行程を通過すれば八王子・川越・松山・吹上・忍(おし、行田市)・上野郷(羽生市)から上野国に入り、川俣・館林・下早川田から下野国(栃木県)に入り佐野・栃木を経て例幣使街道と合流する。

2 家康の遺霊を迎える道

この道路は単に日光へ通ずる道ということだけでなく、徳川家康の遺霊を駿河国久能山から日光へ迎える靈柩の往路となったことに重要な意味を持つのである。

徳川家康は元和二(一六一六)年の一月二十一日発病し、四月十七日巳刻(午前十時頃)に死去した。『徳川實紀』の「台徳院殿御實紀卷四十二」、元和二年四月十日の条に

○十七日巳刻 大御所駿河城の正殿に薨じ給ふ。台寿七十五。御遺命により夜中、尊林を久能山にうつしたまはまつ。本多上野介正純、松平右衛門大夫正綱、板倉内膳正重昌、秋元但馬守春朝四人、靈柩に供奉し、云々。

この事に先立って町奉行彦坂九兵衛光正を中心とした大工中井大和守正次らは假殿の造営に従事した。「是夜微雨そそぐ。」とあり、春雨が静かに降り続いた中で作業が進められていた。規模は三間四方、鳥居、井垣、燈炉二つを置いて、左右に絹幕を張り、絹布を敷いて庭(むしろ)道とした。

更に御本殿の造営が急がれ、大明神道りで千木と堅魚木を備えたもの、次いで、拜殿があり、更に巫女屋、神所所、舞殿、御殿、あぜくら、神籬、楼門といった構造を予定した。

元和二年十月には家康の遺言ということで日光山(下野国都賀郡)に移すための準備がかかっている。

元和三年九月に東照大権現に正一位の追贈を受け、「十一日に久能山の神柩を日光山にうつしまらせらるるにより、土井大炊頭は江戸より駿河に赴く。」と。

日光の社殿が完成したのである。「神廟経営をいそがせ給ひしかば、この程はや成功せしより。けふ神柩を發行せらるるべきに定まる。」

即ち元和三年三月十五日の寅刻(午前四時頃)に久能山を出発した。十六、十七両日三島泊。十八日に箱根を越えて小田原泊。翌日もここに泊り、二十日は中原。二十一、二十二日武州府中泊。二十三日に川越に着き、仙波の喜多院に二十六日まで三泊。三月二十七日には忍(おし)に着いた。

(三月)二十八日、靈柩忍を出まし。利根川にて松平式部大輔忠次御船よそひし。渡瀬川にては本多上野介正純御船奉り。館林に御中やどり有て。佐野の春日岡といふ寺に入奉る。

これが上野国通過の徳川實紀全文である。三月二十八日に佐野の春日岡(今惣宗寺という寺)に泊られ、二十九日に鹿沼の薬王寺に泊り、四月三日まで

I 日光への協往還の概観

滞在している。日光山へは四月四日の未刻(午後二時頃)に到着。日光山座禅院という天台の坊に着いたのである。

この月、日光山の御本社、御本地堂、廻廊、御供所、御殿などの造営が完成したとある。徳川家康の霊柩は四月八日に日光山奥院に安置された。

四月八日は釈迦誕生の日と伝えられているが、本来は山から藤の花などを取って来て、軒にかざったりした日である。一年の米や綿や養蚕などの豊凶を占う日でもあった。農耕生活の出発の日といえることができよう。現在でも山開きなどとして(一月遅れで)実施されている。

こうした年中行事の重要な日を選んで日光山に入った徳川家康の霊柩は、やがて一周忌の四月十六日の夜、神位を假殿から本殿に移され、天台僧正が密法を修し、宣命使の中御門宰相尚長卿が追号の宣命を読みあげ、贈位の宣命を阿部宰相実頭が読み、更に清閑寺宰相共房卿が奉幣を行った。

松平式部大輔忠次は館林藩主榊原忠次のことである。館林藩初代藩主榊原康政、二代は第三子康勝であった。正室に後継ぎがなく、大須賀忠政の子忠次を養子とした。大須賀家は功により松平を称するよう許可が与えられ忠次は一代限り松平を称した。元和二年正月に従五位下に叙せられ式部大輔に任ぜられ、三月に館林城に入った。日光山造営にも援助していることは当然のことであろう。

なお、本多正純は上野介と称し、家康に近侍し、信任も厚く、幕府の中樞に参画した人である。徳川家康の忠臣として酒井、榊原、井伊、本多といわれた一人である。

3 川俣関所と川俣宿

利根川の渡しに係る関所である。利根川の南岸、武蔵国埼玉郡上新郷字別所にあった。現在の埼玉県羽生市内になる。

関所を設置した時期は明らかではないが、慶長十五年(一六一〇)年に関



川俣関所跡(埼玉県側から)

番の一家であった佐藤利兵衛が忍藩から関所番士に任命され、宅地二反、畑一反を支給され、二十俵二人扶持となった記録が佐藤家文書にあることから、慶長年間には関所が設けられたと考えられる。関番の家は佐藤、石川、大映、橋本の四家が古くから当っていたと伝えられる。幕府直轄で伊奈備前守支配から寛永十六年に忍藩の支配下に入った(「新編武蔵風土記」という)。

川俣関所址、子爵松平忠寿書」と刻まれ、裏(利根川側)に「昭和十二年九月北埼玉郡新郷村史蹟保存会建立」とある。現在地は利根川の川幅が広くなり、往時の関所跡から南に移動していることである。

「武蔵志」(福島東雄稿、享和二年以前、「埼玉県史資料編」10)に
上新郷 民真士連軒住ス 馬繼ナリ 耕田十百 麦田少畑多 北利根川同堤ナリ 字別所ト地ニ御関所アリ 是ヲ川俣ノ関ト世ニ唱フ 上野下野へノ往還ナリ 川ヲ渡 上野邑栗都モ川俣村ナリ 行田御城主領預リナリとある。

傍らに石室が三基あり、東から

①天保三千辰年 九月吉祥日 水天宮

渡船中 世話人 講中

②安政六丑未年 四月吉日 三峯山

村中

③天保十二辛丑年 三月吉祥日 象頭山

村中

忍藩では船奉行、船役などの川に関する役職を置いてきた。なお、関所は明治二年正月に廃止された。

日光脇川俣宿（明和村）は日光脇街道の宿にあると共に川俣河岸としての活動があった。

日光脇街道として船渡しは、鑑札三枚を毎年八月に代金四十八文で引船師役所で新旧交換する。渡し守は六人で、渡賃は一人三十二文で、馬の場合は口附共で四十八文の決めであった。近隣は渡し守が米を集めて渡賃を取らなかつたようである。

『封内経界図誌』によると、上州邑栗郡川俣村の脇街道、渡船関係記事は次の通りである。

- 一、御伝馬并渡船有之候ニ付御役所御免尤御証文式通村方二有之候
- 一、御本陣御本陣有之候
- 一、人馬問屋一軒船積問屋二軒有之候
- 一、立入是四人馬武定

私分を遣す節は堀工村・赤生田村江当込其外大御通行などこれあり候節は羽附村・青柳村・上三林村・下三林村・赤堀村・狸塚村の外御他領窪塚村・木崎村・須賀村を合拾式々村にて助郷仕候

- 一、利根川出水節は為水番堀工村、青柳村より相詰申候
- 一、馬渡船式候 先規より御領主御入用にて御灯立公儀より右船御歩行船参候 鑑札三枚村方に渡居年々御書留有之候村方にて所持
- 一、所備船拾艘 屋右年々川船御役所に御年貢水上納仕候 高瀬船四艘

（拠「館林市誌」歴史編）

川俣宿の本陣は塩谷家であった。古文書を所蔵しており、寛永二十（一六四三）年末三月五日付では川俣郷宛で舟渡と御伝馬役があるので以後の諸役は免除する旨のものが、寛文元辛丑（一六六一）年に同様の文書を所



蔵している。これらを最初として多くの古文書を所蔵している。当主は塩谷正邦氏である。なお、川俣河岸については『群馬県歴史の道調査報告 利根川の水運』を刊行している。

日光脇往還は川俣宿と館林宿に本陣が置かれ、館林は足利町の大島藤右衛門が本陣を勤めた。藤右衛門を代々襲名していた。

4 下早川田の渡し



雲龍寺（館林市渡良瀬川北岸）

下早川田宿で渡良瀬川を渡る。慶長年間にはこの日光脇街道として設定されていたと考えられるので、渡良瀬川の渡しも必要にして欠くべからざるものとしてあつたと推定することができる。元和三（一六一七）年の春まだ浅い三月下旬に徳川家康の遺霊が渡つたのもこの渡しで、本多上野介正純の添乗であつた。

幕末の館林藩資料によると、馬渡船が二艘と歩行渡小船を一艘、計三艘の鑑札三枚の代金が四拾八

I 日光への歸往還の概観

文で、毎年八月に書替えになるので代金を川船御役所へ納めて、引替えに鑑札を受けとることになっていることである。

渡守は五人いて、渡し賃は一人五文、馬は口附(馬子)と一諸で十文を申し受けることになっている。武士は渡賃を取らない。これは公用ということなのであろうか。また近隣は渡賃を取らないようので、そのかわりに米を少しづつ集めたという。

『封内経界図誌』によると、上州邑栗郡下早川田村の渡船関係は

- 一、渡船場之ニ付半役笠原七郎兵衛殿御証文村方ニ取得持仕居候
- 一、馬渡船式候
- 一、歩行渡小船巻候
- 右船先規より御領主御入用にて御打立
- 公儀より右船御鑑札三枚村方江渡り居年御書替有之候
- 一、高瀬船七艘
- 一、川下小船一艘
- 右之船村方ニ取得持立年々川船御役所江御年貢水上納仕候
- 一、船積問屋巻軒有之候

(観「館林市誌」、歴史篇)

5 ここを旅した人々

徳川家康の靈柩の通過後、日光脇街道として正式の通路として利用されたようである。日光への参拜の経路として大名の旅行があり、『館林市誌』は寛保元年六月二十五日に越後高田藩主柳原式部大輔社永を筆頭に、勘定奉行、藤沢の遊行上人願存など二十八例をあげている。

また、八王子千人同心が日光火の番衆として往来した。総人数が千人であり、百人が一組で行動したという。

足利学校の校長をしていた武蔵国足立郡之村長徳寺の乗松龍派も江戸時代初期にしばしばここを通っている。

①館林通過大名等一覧
(寛保元年から天明六年まで)

西歴	年月日	通過大名	備考
一七四一	寛保元・六・三	柳原式部大輔	越後高田柳原改水
一七四二	〃 〃 〃 九・九	酒井左衛門(附)	荘内鶴岡酒井忠寄
一七四三	〃 〃 〃 三・三	水野対馬守	御勘定奉行水野忠伸
一七四八	寛延元・七・六	戸田大炊頭	下野足利戸田忠言(たたとき)
一七四九	〃 〃 〃 五・六	戸田大炊頭	戸田忠言
一七四九	〃 〃 〃 七・一	松平 宮内少輔	奏者番邑栗郡窪塚松平忠恒
一七四九	〃 〃 〃 七・五	伊達達江守	伊予守和島伊達村候(むらと)
一七六六	宝暦六・五・三	遊行上人	日光社参の帰途
一七六六	明和三・四・二	酒井左衛門(附)	藤沢遊行寺第五一世願存上人
一七六七	〃 〃 〃 七・六	戸田長門守	忠寄遺骸(明和三・三・三〇没)
一七七〇	〃 〃 〃 七・三	遊行上人	戸田忠言
一七七二	〃 〃 〃 九・〇	戸田長門守	遊行寺第三二世任券上人
一七七四	安永三・八・三	戸田忠言	戸田忠言
一七八〇	〃 〃 〃 九・四	松平大和守	戸田忠言
一七八〇	〃 〃 〃 九・七	准后 宮	下野宇都宮松平忠恕(ただひろ)
一七八〇	〃 〃 〃 九・九	津軽土佐守	陸奥弘前津軽信車(のぶやす)
一七八六	天明六・八・四	戸田大炊頭	下野足利戸田忠言(ただたか)
一七八六	〃 〃 〃 六・九	津軽土佐守	津軽信車
一七八六	〃 〃 〃 六・九	戸田大炊頭	戸田忠高
一七八六	〃 〃 〃 六・九	戸田大炊頭家中	戸田忠高
一七八六	〃 〃 〃 六・九	松平越中守	奥田白川松平定信
一七八六	〃 〃 〃 六・九	人参御用	
一七八六	〃 〃 〃 六・九	日光山御寺院方	
一七八六	〃 〃 〃 六・〇	並人参御用	
一七八六	〃 〃 〃 六・〇	松平能登守	美濃岩村松平興保
一七八六	〃 〃 〃 六・二	秋田信濃守	陸奥三春秋田信季(よしすえ)
一七八六	〃 〃 〃 六・二	松平越中守	松平定信

〔備考〕 本表は「館林問屋文書」によつて作成した寛保元年から四六年間の大名等の通過状況であるが、資料が少く実態をつかんだものとはいえない。

三、日光裏街道（大胡道）

日光例幣使街道が中山道倉賀野宿から分かれて五科宿へ入り、利根川を渡る。赤城山が前面に大きく広がる。その赤城山の東へ山麓をかすめて日光裏街道は真つすくにつづくのである。水田と桑畑がこの街道を埋めつくすかと思われる景観である。

大胡宿を通り、室沢宿（勢多郡粕川村）を抜けて板橋（新里村）から神梅（山田郡大間々町）へ下り込むと足尾からの綱山街道に合流する。この道は日光への裏道であるが、足尾への道といふことができよう。それにも増して赤城山南面の生活道路の一つである。

大胡宿中央の道しるべは文化六（一八〇九）年のものであるが、前橋、米野、五科、伊勢崎、日光、大間々の六方向を教えている。この南を示す五科道がここでいう日光裏街道である。同じ南を示す伊勢崎道は大胡下宿から荒砥川（もとの湯之沢川）を渡り、川沿いの南下する道であった。五科道というのは五科河岸への道といふことであろう。大胡地内でもこりようと記された道しるべがあり、上増田（前橋市）などでもいくつも見掛けるであろう。利根川から河岸積みをして江戸へ運ぶために五科河岸へ行く人たちがいたといふことなのであろう。これが赤城山南面における必要な道路の一つであったと言ふことができる。

ここを旅した人々

○ 高山彦九郎（たかやま・ひこくろう）

「北行日記」は寛政二（一七九〇）年十一月に足尾から花輪を経て深沢から板橋、室沢宿まで日光裏街道をたどつたことを記している。ここから赤城神社（宮城村三夜沢）を参拝したので苗ヶ島から三夜沢へ入り、参拝を終つて柏倉一ノ関から濃久保、横沢へとたどつてゐる。

○ 安積良斎（あさか・こんさい）

江戸時代後期の儒学者である安積良斎は文政十三（一八三〇）年にこの道を通つた。

（閏三月）廿四日。荒大胡。過室沢。山漸深。谷漸遠。

東省日録にある足尾への道である。これから深沢に行き、渡良瀬川の峡谷に沿つと花こう岩の巨石が「終日、絵画（画図）の中を行くようである」と。文もまた躍動する。

良斎は佐藤一斎や林述斎に師事して故郷の二本松藩の儒者の後に江戸で昌平校の教授となつた。

○ 信州善光寺在の百姓平蔵

天保六（一八三五）年に信濃国（長野県）の善光寺在の島河原村の百姓平蔵が、河原浜村（大胡町）で病氣になつたことが河原浜区有文書にある。平蔵は江戸へ出て浅草で日雇稼ぎをしていたが、国元の信州に帰ることになり、日光参拝を計画し、その帰りを日光裏街道にした。

日雇いで故郷に呼び戻されるというところが、金も少なく、飲まず食わずで大胡町河原浜まで来て歩けなくなつたのであつたのである。単物の紺のたてじまの着物（ただし古物とある）を着て、小倉じまの三尺をしめ、菅笠一つ、ござ一枚で、外の品物は御座なくとある。こうした庶民の通る道が日光裏街道だったのであろう。幸に村では医師に診察してもらつた。食わずにふらふらしたのだから、薬をもらい食事をすれば次第に元氣になり、国元まで帰送

りで帰ることができたという。

○ 英国公使の旅行

明治三年四月九日東京を出発し、日光へ旅行し、帰路を日光裏街道をたどった。英国公使、同士官六人、婦人一人の八名に附添五十人という大勢であった。日光から細尾峠を越え足尾へ入り、花輪、大胡をたどり、前橋へ出て中山道に入ったという。前橋藩小島養平の廻状が各宿へ送られたが、英国公使とのみで名前の記載がない。

なお、金精峠が開通になる明治五―六年以前のことなので日光裏街道を利用したのであろう。

○ 原 敬(はら たかし)

大正七年に総理大臣になった原敬の若き日に日光裏街道をたどった。明治七年四月に東京から故郷岩手県へ帰る際に富岡製糸所へ寄り、ここから前橋の岩附屋に宿泊し、三十日に前橋を出た。大胡、室沢を過ぎ水沼村に至り、星野長太郎の製糸所を見て、花輪、神戸とたどった。大胡や室沢などすべて寒村なりと、花輪から神戸で大雨にあつてゐる。

四、根 利 道(大間々道)

沼田宿から片品川に沿って赤城山北面を通る道は、沼田側からは根利道であり、日光裏街道といわれてきた。この道は根利で大間々道ということになるが、その大間々宿からすれば根利道と呼ばれてきた。

道するべは、よく「にっこう」を指している。沼田平から日光参詣に利用されたのであろう。「日光を見ないうちは結構と言えない」という昔からの言葉があつたように日光参拝は多くの人の願望であつた。

一つの道は根利から小中へ抜ける。日光への道であると共に古峰原への参拝道でもあつた。また、大間々宿へ直行する道が利根郡のまゆを運ぶ人々にぎわつた。

根利宿は高山彦九郎もここで休みどぶろくを飲んでいるように一つの宿場集落をなしていた。昭和二十二年九月のカスリン台風は大水害となり、この地の宿駅風景を押し流してしまつた。問屋(林英男氏宅、三井屋・新井三郎氏宅)、奇応丸(有名な製菓舗)などの屋号が残つている。高山彦九郎がどぶろくを飲んだのは伊助という者のところとある。百軒ばかりの集落というから山中の町ということができよう。彦九郎の尋ねたのは大原宿の金子家。根利の道のたどる先は大原宿(利根郡利根村)であらう。北に道をたどれば会津道である。会津からのたどる道について次の資料がある。

古河古松軒の『東遊雑記』の会津山口村(福島県)の記事に

上野国への街道は、南へ南へと行きて、是も九里余有、岡国の境に沼山(尾瀬が原のこと)と称せる深山、甚峻阻にして、人家無所凡五里余有、案内知らざるものは曾て通行ならざる山道と案内の者の物語りなり。

古松軒は子曜(しよう)、平次兵衛と称した江戸時代の地図学者で、備中(岡山県)の人で蘭字を修め、蘭方医として長崎で学ぶうちに測量に興味をもち、地図を製作。九州あるいは東北地方各地を歩いた。文化四(一八〇七)年に八十二歳で故郷に没している。

大原宿は大間々町の商圏に入つていたのである。元禄七年(一六九四)年の大原の小林家文書は桐生領大間々宿彦兵衛が会津権枝侯からそぎ板を買ひ、運搬することを述べている。

大間々宿はまゆ市、糸市、網市として取引高が大きかった。利根郡内のまゆを大原宿で集荷して大間々宿まで馬で運んだことが多きな輸送だつた。大間々宿は既に江戸時代初期において六斎市が「弥々繁昌」したといわれている。元禄十五年には西に一里半ばかりの山上宿の市場も合併吸収するという

繁昌ぶりだった。

根利からの品物はやはり山間地での産物が出荷された。赤城炭は年間四万俵を目標とし元禄十四年に前橋藩の許可を得て焼き出している。また楸柄やそぎ板(厘根板)などがあり、根利は砥石の発見、綱山の発見などもあった。根利砥は鎌の砥石として全国各地へ頒売(上州、武州、尾張などを除いて)された。

この地を旅した高山彦九郎は各地で民情の記事を残しているが、その行程の大略は次の通りである。

天明五(一七八五)年七月十三日に細谷(太田市)の自宅を出発し、小金井、藪塚で休憩、大間々宿から根利道(日光裏街道)をたどっている。「北上旅中日記」である。

「深沢から半里(二キロばかり)にして城下りといえる所にて坂を下り、直に花輪道、左りに転じて沼田道なり。予は金子氏及び腰本村の久右衛門なる者と沼田道に入る。走り行く也」と。柏山に宿泊している。

翌十四日は曇であった。柏山から鹿角、小出屋という峠から、根利に入った。「根利村山間狭ふして人家百軒斗り、黒比山の東北の麓、松平大和守(前橋藩主)殿領分、わらびを名産とす、献上になるよし。」

に水沢、小麦峠、大原にたどる。大原宿の金子重右衛門照泰を尋ねたのである。沼田藩の絵図師だったという。旧交あり。

帰路も柏山に泊り、大間々宿を通り帰宅している。

五、群馬県内の東照宮について

日光の東照宮との関連で県内の東照宮をあげてみよう。江戸幕府の創始者徳川家康をまつる神社であるから許可されるなら方々に建立される可能性があるろう。そこで特別にゆかりの深いところ以外は許可されなかったようであ

る。幕府では江戸城内紅葉山、久能山、日光、江戸上野の四か所の直接祭祀を行なってきた。

上野国内では新田郡内に二社、前橋市に一社ある。以下略記する。

1 東照宮(新田郡尾島町世良田)

世良田の長楽寺境内に東照宮を創建したのは寛永二十一(一六四四)年と伝えられている。徳川氏の始祖としている徳川義季のゆかりの寺である長楽寺を、氏寺として保護した。長楽寺の創建は承久三(一二二二)年に宋西の高弟宋朝を開山として新田氏の嫡孫義季が開基した。臨済宗であった。

この長楽寺は江戸時代に徳川氏の先祖を祀るということから、慶長八(一六〇三)年に幕府は寺領百石を寄進したり、徳川家康の信任あつたい天海を住職として補任するなどのことがあった。天海は寛永十八年(一六四二)年に長楽寺の住職を引継ぎ、同時に境内に東照宮を勧請した。なお、長楽寺は天海が入寺するについて天台宗に改められた。

この世良田東照宮は二代将軍秀忠が日光に建立した建物を移築したと伝えられている。三代家光は日光に豪華華麗な建築を企画し、旧社殿を長楽寺境内に移築したのである。天海が長楽寺に入った時に既にその計画が立てられ、寛永二十一(一六四四)年十月十一日に社殿落成遷座式がおこなわれたのであった。

当時の建立になる本殿、拝殿、唐門は国指定重要文化財である。本殿は一間社流造で銅板葺である。拝殿は正面は五間、奥行三間の入母屋造平入で、正背面に軒唐破風をつけている。唐門は四脚門で、左右に唐破風をもつ平唐門である。

創建と共に社地二百石が寄進された。正面の参道右側の鉄製の大灯籠は元和四(一六一八)年に秋元長朝の奉納による。銘文が陽鏝になつており、奉納灯籠東照大権現御宝前 元和四戊午歲七月吉日 秋元越中守藤原長朝 大

工中林仲次とある。当時の秋元氏は総社藩主であった。

2 東照宮（前橋市大手町）

前橋城内北側にまつられた東照宮は前橋藩主松平氏が勧請したものである。松平家の先祖は徳川家康の第二子結城秀康の五男である松平大和守直基で、寛永元（一六二四）年に越前国勝山藩主となった時に東照宮を城内に勧請していた。転封の度に遷して最後の前橋城内に落付いたのである。

寛延二年に前橋藩主になった松平氏は、利根川の洪水によって川越城に移転、再び前橋に戻ったのは慶応元年のことであった。東照宮はその時に企画され、明治四（一八七二）年四月に当地へ遷座した。

藩主や藩士の敬慕する神社として、川越城内から社殿も移築されたが、廃藩となると地域住民の神社としてまつられるようになり、近隣七か町村の氏子ができた。旧県社であった。

また菅原神社が酒井氏時代であり、学問の神として天満宮まつりが実施されてきたので合祀し、祭神は徳川家康、菅原道真の二柱を中心として他に三柱をまつっている。境内地に彰忠碑があり、細谷而乗作のとき、鈴木藤十郎の鋳造による。また殿橋招魂社がまつられ西南役以来の戦役で没した人たちの追悼をいのる。

3 東照宮（尾島町徳川）

徳川の地は新田氏の支配地のほぼ中心にあたるところで、世良田郷の東である。徳川家康は三河国（愛知県）で松平氏を称していた。幕府政治を開き將軍になるには鎌倉幕府から室町幕府へと源氏の伝統があった。そこで家康の祖父清康は新田氏の子孫である徳川某で時宗の僧侶として遊行した者の子であると、徳川氏を称し、源氏を名乗った。徳川は先祖の地となり、ここに東照宮が建てられた。

II 道の確定

一、道の確定

○日光脇往還

1 川俣宿から館林城下へ

埼玉県羽生市の川俣閘所跡から利根川を渡ったところ、現在、昭和橋のあ



大佐貫集落（右側が畑）



青柳の三差路（右側が日光脇往還杉並木の起点）

るところが、富士見の渡し跡である。昭和橋を背にして、提防を右に降りたところが川俣宿である。旧本陣（塩谷家）の東から、まっすぐ北に延びる道が、「日光脇往還」である。川俣宿は、約七〇メートルほど続く。川俣宿の終わりに利根加用水（旧上休泊堀）が流れている。

ここから、旧道を五〇メートルほど進んで、国道一二二号を横切って進む。

まもなく、大佐貫集落に出る。大佐貫集落をぬけると、矢島集落である。矢島集落の出はずれで、ゆるい右カーブになり、再び国道一二二号に出る。

この先は、昭和三六（一九六）年頃の土地改良事業で畑になった。そのため、道路はこん跡をとどめていない。

谷田川にかかっている園道の青柳橋の下流約三〇メートルに、コンクリート製の橋杭が残っている。ここが旧道である。川底には木製の橋杭が残っているのが確認できる。

谷田川を渡ると、ピニールハウスの東側に細い農道がある。これが旧道である。ピニールハウスによって道路が半分以上なくなっている。谷田川の提防を越えると砂利道がある。約七〇メートル進み、カマツカ自動車の車置場を横切って、床屋の前で国道一二二号と合流する。ここは、青柳集落である。合流点から園道を約一・三キロ行くと、青柳駐在所の前で道路が二股になっている。右が日光脇往還である。ここから五〇メートルほど行ったところから、かつて杉並木が続いていたところである。

小桑原集落を通り過ぎ新宿に向う途中で、県道前橋・古河線のバイパスを

II 道の確定

横切る。しばらく行くと、西側に館林市立第六小学校がある。ここから、一〇〇メートルほど行き、東武伊勢崎線の踏切を渡る。四〇〇メートルほど行くと、西側富士嶽神社に行く「富士浅間入口道」と刻まれた道標がある。ここから、北へ一キロほど行くと、新宿一丁目の交差点に出る。東に進むのが「古河往還」（現在の主要地方道前橋・古河線）である。

直進すると、鶴生田川を渡って、館林駅入口の交差点に出る。この手前東側が旧江戸口門跡である。ここからが館林城下である。

駅入口から、北に七〇メートルほど行くと「大辻から一五〇メートルほど行くと、館林郵便局が東側にある。ここを左に行くのが「古河往還」である。直進すると約一キロで旧佐野口門があったところに出る。この付近を台宿という。

旧佐野口門跡を越えると、下り坂になる。坂を降りる途中、道路の西側に館林城の外堀がよく残っている。

2 館林城下から下早川田へ

館林城の外堀を越えてまもなく、道路が二股に分かれる。左に行く道際に道標が二つある。右に道をとると、約一キロ行くと、東武佐野線の踏切がある。踏切を渡って二〇〇メートルほど行くと、主要地方道佐野・行田線が合流する直前に、左側に自動車の進入禁止になっている細い道がある。これが日光脇往還である。東側の道路は、昭和九（一九三四）年の陸軍特別大演習の時、作られたものである。旧道は、一方通行のため、佐野・行田線の左側にあるとりせんのところを左折してからでないと入れない。この旧道は、往時の面影をよく残している。

下早川田集落に入り、渡良瀬川の提防を越えた観音坂に馬頭観音が数基ある。こここの河原は、かつての早川田河岸であるが、面影はまったく残っていない。また、矢場川が流路をつけ変えられたため、渡良瀬川に直接行くこと



下早川田の日光脇往還（左が観音坂石仏）

ができない。

渡良瀬川を渡ると、下早川田島ノ内である。左岸の河岸の道路は、昭和三十（一九五五）年ごろの河川工事のためなくなってしまう。現在の渡良瀬川左岸提防の付近で、道路は大きく東に曲がっていた。今の渡良瀬大橋の下をくぐった北に、才川にかかっていた橋杭が残っている。才川を渡った右側に、旧藩時代に御分杭が立ててあった。

日光脇往還は、この後、才川左岸沿いに進み、庚申塚から佐野へと向っている。

〇日光裏街道

1 五料宿から駒形宿へ

五料宿から柴へ至る街道は、日光例幣使街道と重複し、現在の五料橋の一〇〇メートル程下流で、利根川を渡った。渡ったところで今は川原となっているところを北へ進み、五料橋をくぐって数十メートルで右に折れ、柴宿の通りにつながるが、

柴は宿の西のはずれに、八幡宮がある。駒形・前橋へ向かう街道は、八幡宮の東側で、たばこ店のある角を北に折れていた。そのまま北進すると、道は泉龍寺につきあたると、その手前で寺の東側に移った旧道は、寺の杉林を後にして畑の中を行き、県道駒形・柴町線に出るが、その直前の約一三〇メートルの間は、畑となって道は消滅している。



五料橋（昭和43年撮影）



稲荷町（今村）地内の旧道



駒形町五丁目付近の旧道（前橋方面を望む）

している。

再び県道に合流した旧道は、S字形のカーブを描いて稲荷町の集落に入る。稲荷町はもとは今村と称していたが、昭和になってから、現在の町名で呼ばれるようになった。葦川を隔てた西方には、戦国時代の遺跡今村城跡が残っている。集落内の旧道は道幅が拡張され、そのまま県道として利用されている。しかし県道としての整備は比較的遅く、車の通行量が増えてきたのは、最近になってからのことである。

家並のほぼ中央に今村神社があり、その前の道を西に入っていくと、九〇

メートルのところに円福寺がある。さて、街道は今村を抜けて北に向かい、伊勢崎と前橋市との境界を過ぎて、県道前橋・古河線と交差する。この交差点よりも六〇メートル手前に、車がようやく通れるほどの狭い道が横切っており、これが旧道であった。ここには天保年間に建てられた、円柱の大きな道しるべが見られる。右に曲がると、一〇〇メートルで県道に合している。駒形へ向かうには左折するが、こちらは三〇〇メートルの地点で、現在の県道に合流している。

駒形六丁目バス停留所付近で、県道と二股する旧道は、そのまま県道になって、前橋方面へ向かっている。二〇〇メートル行くと、右側に駒形神社の鳥居がある。さらに一六〇メートル進むと、信号機をついた交差点があり、ここを横切っているのが、かつての玉村から大胡へ抜ける、旧道であった。その角には酒店があり、五丁目のバス停が置かれている。

県道駒形・柴町線に出た旧道は、それに沿って一直線に一キロ走り、県道が左にカーブしている地点で県道と分かれ、右にやや曲がりながら、田中の集落に結ばれていた。県道から分かれて、集落の南に至る区間約二五〇メートルは、耕地整理が行なわれ、旧道はその跡をとどめない。田中は集落の東寄りを、南北に走り抜け、舗装はされているものの、狭い部分も多い。県道高崎・伊勢崎線を横断すると、道は広くなって北西に向きをかえ、諏訪神社を南に見て、葦川に架かる田中大橋を渡る。葦川はコンクリートで改修され、橋も立派なものに架け替えが行なわれている。葦川から三五〇メートルの地点で、道は北と西に分岐するY字路となる。旧道はここを北西に真っすぐ進み、宮郷中学校の校庭付近を通って、稲荷町の東南端、信号機のあるところで、県道駒形・柴町線に出ている。Y字路からここまでの間、約一、二キロの部分は、耕地整理により旧道が完全に消滅

II 道の確定

前橋へ行く旧道はそのまま直進し、駒形十字路を過ぎて、一丁目バス停の少し手前、前橋成形の工場前を右に曲がった。一四〇メートルのところ、今度は左に曲がり、やがて狭い田んぼ道になって、七五〇メートル程の地点で、現在の前橋古河線に一致する。

一方、五丁目より左折して玉村へ行く旧道は、駒形長寿観音堂の前を通り、清内橋を渡って葦川を越えるが、そこから先は、耕地整理が行なわれているため、その跡はわからない。

2、駒形宿から大胡宿へ

駒形より大胡へ至る道は、五丁目まで右に曲がり、かたわらに庚申塔を見ながら北進し、新興住宅地のなかを走る。駒形から下増田に行く道と交差し、そこを過ぎると、旧道は駒形バイパスによって寸断される。バイパスの地下道で東側をう回し、広瀬川を渡って西に進んだところで、ようやく旧道にもどることができぬ。

旧道を進むと前方には、県道藤岡・大胡線の、両毛線をオーバークロスする高架橋が見える。駒形駅入口付近から、旧道は県道と一致しているのであるが、高架化工事に伴って、この付近は大きく変わってしまった。高架橋を下ると、県道は左にゆるやかなカーブを描いて進むが、旧道は真つすぐに続き、畑の中を曲がりくねって北へ向かう。

前橋市立筑井小学校、近戸神社のすぐ西側を通り、旧道は桃ノ木川を渡る。川は改修されて西側へ拡張され、三倍位の川幅になった。かつての道は、サイクリングロードよりもさらに東側の付近を、川に沿って少し北に走り、筑井大橋の三〇メートル程上流で、川を渡っていた。そして堤防に沿って一〇〇メートル行き、小屋酒店の角を右折、集落の中を通り、Y字路になったところを右に行くと、すぐに新田用水の橋に出る。そこから三〇〇メートルの区間は、今の農道に一致して北進するが、その先は田んぼになっていて消え

ている。耕地整理される前は、やや東に向いて、小島田集落の東南のはずれに出ており、あづま道にぶつかっていた。

そこから旧道は、あづま道と重複して数十メートル西へ走り、北に曲がって細い道で国道五〇号に達する。国道を横切った旧道は、やや広い道路になって、左にカーブしながら、県道藤岡・大胡線に合流する。前方には、前橋東高校の校舎が、田んぼの中に見える。

小島田集落の北で県道に合流する旧道は、富田町に入ると、農業総合研修センターのところで大泉初川を渡る。県道はここを直線でも渡っているが、旧道は今の橋の手前から川に沿って左に入り、研修センター北側の道に架かっている橋のところ、川を渡り、東に折れてまたすぐ北に曲がって、大胡に向かっていた。ここから先の旧道は、大胡町の南端まで、現在の県道とはほぼ一致していた。



富田町地内の旧道

中世の用水遺構である女堀を横切り、天台宗正法院、三柱神社を右に見て、県道今井・前橋線と交差する。その交差点から、三五〇メートル北へ行った左側の畑の中には、「馬頭大士」の塔が、忘れられたかの如く建っている。

富田町に入ってから旧道は、徐々に標高を増し、またゆるやかなカーブを繰り返しながら、前橋市を離れて、大胡町茂木に入る。

大胡町へ入って五〇〇メートル程走ると、道は右にカーブして坂を下り、小さな川を渡る。このカーブの

地点一〇〇メートルの間は、県道よりも右側に細い道が残っており、これが旧道であった。

川を渡って一〇〇メートル先の左手で、少し奥まったところには、産土様のお宮がある。そのお宮のすぐ東にある狭い道が旧道で、県道から入ってから数十メートルで右に曲がり、石垣の南側を通って、再び県道に合流している。そして大正用水に架かる茂木橋を渡り、民家や商店のある通りを、北に向かっている。これが東小路といわれる通りで、これとは別に西小路があった。産土様の東の道を右に曲がらず、そのまま直進し、円城寺の西で両者は合流している。

工事中の大胡バイパス交差点を過ぎると、県道は右にカーブするが、旧道はここで左に入り、住宅分譲地の脇を通って、上毛電鉄大胡駅南側の農協倉庫に達する。そしてそのまま駅構内を斜めに横断し、駅前道へ通じていた。旧

駅から一〇〇メートル北に行った左側に、馬頭観音がまつられている。旧道はそこを右折し、大胡宿の通りに出ている。大胡宿は上宿、中宿、下宿に分かれ、下宿の南端で西に行く駒形道、東に行く伊勢崎道とが分岐している。下宿から北に向かうと、広い十字路があり、西に曲がれば前橋に通じる。右手の自転車店前には、「南五料伊勢崎、西前橋米野、北日光大間々」と刻んだ文化六（一八〇九）年の、大きな道しるべが残っている。

通りをさらに進むと、旧道は東に折れ、上宿に入って荒砥川の流れに出合う。大胡宿はここで終わり、大川橋を渡れば河原浜である。また、赤城三夜沢に通ずる道は、大川橋の手前を左に曲がり、大胡城跡のなもとを過ぎ、川の流れに沿って北に続いている。

3 大胡宿から室沢宿へ

荒砥川にかかる大川橋を渡ると大胡道は、ゆるやかな上り道となり、一〇〇メートルほどでY字路になる。このY字路の角のエバラ化粧品店前に「左

日光」と刻まれた道しるべが建っていて、大胡道はここを左手に折れることを教えている。

左折するとだんだらの上り坂となり、七〇〇メートルほどで小林商店前にある双体道祖神のところで分かれるが、大胡道は右手の広い、道幅六メートルほどの舗装道路を進む。このあたりは新しい家々が目につく。やがて、左右に曲がりながら八〇〇メートルで能満寺川の橋を渡って宮城村に入る。このあたりは道沿いにわずかながら家々が見られ、すぐ両側に広い桑畑が広がってくる。宮城村に入って六〇〇メートルほど直進すると、二つに分かれるが大胡道は右手に入る道幅五メートル近くの道となる。両側に桑畑が見られるが、すつかり舗装され旧道の面影があまり感じられない。やがて、南から来た道に合流して左手北にカーブして進むとT字路になる。ここには南向きに庚神塔群が見られ、一番右手にある庚申塔の白石は道しるべになっ



馬場の旧道



室沢の旧道（県道から分かれて旧道に入る）

II 道の 確 定

て、「左日光みち」と刻まれ、大胡道は左手に直進することを教えている。北に進んだ大胡道はこのT字路から三〇〇メートルほどで前に分かれた県道上神梅大胡線に合流し、現在の県道を北に進む。四〇〇メートルほどでまたT字路にでる。でた突きあたりが宮城村立宮城小学校になっており、この前を右手に折れ、県道を室沢方面に進むことになる。

小学校前から東北東に一・五キロ近く県道を進むと、大胡道は馬場集落西にあるいこい屋食堂の少し手前で県道から分かれ東方向の旧道を進む。この旧道は舗装されているが、道幅が急に狭くなり、三メートルほどの道となって進む。このあたりは旧道の面影が幾分感じられ、左側に石垣がよく目につく。

県道から分かれて六〇〇メートルほどで右手に大きなミラーがあり、ここを左折し五〇メートル近くで県道に合流する。一〇〇メートル進むと、右手に「宮城村指定重要文化財」となっている常夜燈のある馬場の十字路にでる。この十字路を横断して、三〇〇メートルほどで粕川の協和橋を渡り粕川村に入る。橋から二〇〇メートルで県道から分かれ、北側の室沢集落内に入る。途中長崎大地蔵尊や大きな民家の蔵の前を通る。北側に入った大胡道は、舗装されているが、道幅は三メートルほどになり、道沿いには古い蔵も見られ、旧道の面影をよく残している。やがて、右手に折れ、大きな民家の裏をカーブして山伏川にかかる橋を渡る。二〇〇メートルほどゆるやかな上り道を行くと県道にでる。大胡道はここを左折して室沢宿に入る。

4 室沢宿から神梅宿へ

室沢宿をでた大胡道は桜の木が植えてある辻の東側から新里村関方面への県道を渡り、金徳寺の東側を北に進む。急に傾斜が急になり山道にさしかかった感じになる。村社八雲神社の東を通り左に右にカーブして三〇〇メートルほど進むと、右手に眺望が開け、一〇〇メートルで十字路を横断するとゆる



八雲神社北の大胡道

やかな下り坂となり、左に曲がりながら三〇〇メートル近くで兎川を渡ると新里村に入る。このあたりは道幅が三・五メートルほどで舗装されているがかなりでこぼこが多い上り道となっている。一〇〇メートルほどで左手に赤城の百足鳥居を見ながら左(東)へカーブして下り坂となる。二〇〇メートルほど進むと五差路にでる。大胡道はここから道幅四メートル余りのゆるやかな上り道となる。七〇〇メートルほど進むとクランク式の十字路を横切り上板橋の青木商店前、上電バスの上板橋停留所前の広いT字路にでる。大胡道は道幅七メートルと広い道になり、右手に進み、左手にカーブして急に下り坂となる。三〇〇メートルほど下って粕木川にかかる鍋沢橋を渡ると道幅が狭くなり、一〇〇メートルほど上ると十字路にでる。右手電柱の下の小きな道しるべが「北高泉・神梅」と教えている。大胡道はこの十字路を左折して北に進む。急に山道にさしかかった感じがするほど右に山の急斜面を見ながら、十字路から二〇〇メートル近く進むと、正面に山を切り開いてつくった桑畑が見えくる。大胡道はここから右手に入る二メートル余りのじやり道となる。五〇メートルほど上ると右に入る一メートル余りの山道となり、歩行がやや困難になるがはつきりと旧道が残っている。三〇〇メートルほど山道を進むと赤城カートランドへの舗装道路にでる。この道を横断して二メートルほどのじやり道を下り、やがて浸食によって両側の畑面より低くなった道を一〇〇メートル進む、さらに



高泉地区の旧道

二〇〇メートルほど進むと県道にでる。

県道にでると道幅四メートルほどの下り道となり、高泉集落の家並が見えてくる。県道にでたところから約一キロで右折して県道から分かれて進む。やがて正面に小高い丘が現われてくる。この丘の下を左にカーブして二〇メートルほどで電柱の前を左折して山道を上ることになる。

一メートル余りの旧道がはっきり残され、普段はほとんど往來がなく、ハンターなどに利用されている。この山道を一〇メートルほど上り、

県道を横切つてさらに三〇〇メートル余り上ると県道にでる。
 県道にでた大胡道は二〇〇メートルほど県道を同一の道を進み、左手に赤城ロマンド別荘地と書かれた塔のころを入り北に三〇〇メートルほど上ると、右手に入る二メートルほどの狭い道にでる。大胡道はここを右折し、五〇メートルほどで左折して畑のあぜ道を進む。このあたりは開墾のためほとんど道がなくなっている。やがて、松林の中に入って、一キロ余り下ると上神梅の集落に入る。大間々用水の流れている石垣を左手に沿って走る二メートルほどのじり道を下ると、右手に眺望が開けてくる。一〇〇メートル余り進むと神梅宿下宿に入る。

〇根利道

1 大原宿から根利集落へ

会津街道から分かれて根利へでる道として最も古くから利用され、人馬の往來も盛んだつたと考えられるのが、大原宿から島古井を通る道である。大原から島古井に出るには二つの道があったといわれているがどちらが本道かはつきりしない。一つは県道大原―老神線を大原の信号から約三〇〇メートル入った所を右側に折れる道である。現在は農免道路になっていて道幅は広がっているが数年前まではかなり細い道であったという。畑の中を通過して対岸を見渡しながら下つていくと片品川にかかる島古井橋という赤い吊り橋にぶつかる。橋を渡れば島古井の集落である。もう一つは、先程の県道をそのまま老神温泉に向かって温泉街に入る手前、朝日ホテルの裏手を右に入つてゆく道がそうである。そして島古井の集落のはずれにある天満宮のあたりから山道を上つてゆく。

時代的には大原―島古井のルートよりも新しく江戸時代末期に開かれたのが、追貝から大橋を通り、老神の対岸から島古井に出ないでそのまま根利方面に出る道である。この道は追貝を出て間もなく栗原川を渡り、大橋の集落の裏手を南下し、老神温泉街の対岸をそのまま断崖の中腹をぬうようにして、東明館、太陽ホテルの敷地を通過して、青木館の西から山道に入り「大夫落し」と呼ばれる難所を越えたと間もなく、島古井から来る道とぶつかる。

島古井から来る道と老神から来る道がぶつかった三差路から旧道は、ほぼ南へかなりな勾配をもって曲りくねりながら上つてゆく。このあたりは昔の街道の様子をよく残している。途中、来た道をふりかえれば眼下に島古井の集落と老神温泉街がよく見渡せる。旧道は途中林道によれば何カ所か寸断されている。大きなカーブの所で一度林道に出るがまたすぐに山道に入り上つていく。現在の林道の上をほぼ並行して進んでいくと林道にぶつかる。



花見ヶ原への道（旧道と林道が合流する付近）

た所にあつた。峠から下る道も熊笹が生い茂り唐松林になつていて旧道ははっきり確認できない。林道の少し北側の沢筋から県道に出て、そのまま県道を下り、花見ヶ原入口を過ぎて間もなく右側に松の大きな木がある。旧道はそこから沢へ下りてゆくと道形はあまり残つていない。小黑川を渡つて、花見ヶ原へ行く林道の左下を林道とほぼ並行して進む。

途中、林道を横切り再び左側の寒戸川の沢へ下りていく。高圧線を左に見てかなり急勾配の坂を下つていくと寒戸川に作られた岩下沢三号ダム

3 寒戸集落から柏山集落へ

の脇に出て、麦久保からくる林道と合流する。ここから寒戸までは林道とほぼ一致している。途中、一部だけ林道の少し上を旧道が残っているがすぐに合流し寒戸の集落へ出る。

寒戸から林道を麦久保へ向かう途中右側にカーブミラーがある所から旧道に入る。分枝跡の裏を通つて星野治郎氏の裏へ出てくる。この間も旧道をよくとどめている。星野さん方から沢を渡り、急勾配の坂を曲ぐりねりながら熊笹の中を上つていくと松が沢山生えているかなり平坦な場所へ出る。ここが平瀬である。平瀬からは杉林の中をかなり急な坂を下つていく。旧道は深い堀状にえぐられていて確認しやすいが、雑木などの障害物が多く通行困難な所がある。山道をほぼ下りきつた所が少し平地になつていて、昔はここに



柏山の家並み（県道は旧道を少し広げてある）

数軒の人家があつたが、現在は新井一郎氏の家だけである。その前を通つて高橋川へ向かつて旧道はさらに下つていく。高橋川の最上流部にあるえん堤のあたりで対岸へ渡り、また山道を上つていくと三差路になっている。左折すれば高橋集落への近道で、旧道はそのまま山を下つていく。間もなく県道におつかるが、現在、橋梁工事をしているあたりに出る。

県道をいき鹿角川を渡つてカーブを曲ると鹿角の集落の入口で県道と別れ右に入る曲りくねつた道が旧道である。



麦久保付近を通る旧道

鹿角の集落の中を通り鹿角ガーンデンの先で再び県道に出て、そのまま真すぐ南へ進み、赤城登山口の鳥居沢をこえると柏山である。

4 柏山集落から上神梅集落へ

柏山の集落から赤城神社入口までは現在の県道と一致している。老人センターと赤城神社の間を通る旧道はかなり昔の状態をよくとどめている。



柏山～下原へ至る旧道

道との分岐点になっていた所である。舗装道を少し西へ行くと左に沢に下る道がある。川口川を渡りゆるやかな勾配を上つていくと県道にぶつかる。電柱のすぐそばのカーブミラ

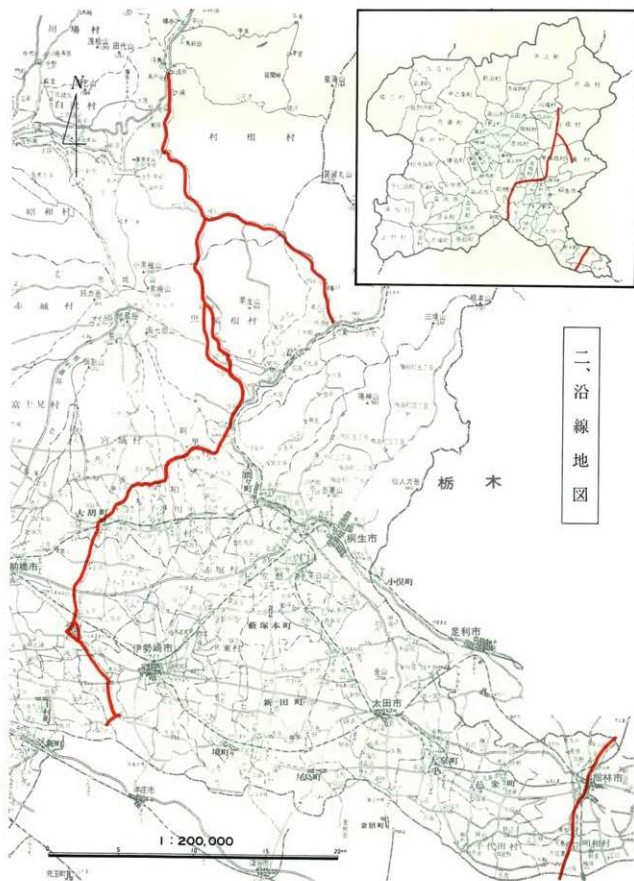


柏山(赤城神社前の旧道)

ここから上神梅までは足尾銅山街道としても利用された。赤城神社から少し下ると用水堀にぶつかる。このあたりから道形がはっきりしないが沢を渡る旧道をはっきり確認することが出来る。林の中をぬけ畑の真ん中を通つていくと、水のほとんど流れていない沢にぶつかる。左手の道は前田原へ出られる。沢を渡るとすぐに旧道は左へ折れる。真つすぐ行くと川口集落に出、右へ折れて少し行けば出合原である。沢沿いに山道を下る旧道はかなり昔の面影を残している。沢から離れて少しいくと人家が二軒見えてくる。下原と呼ばれる所で、かつてはもつと人家もあったそうである。ここから舗装道を下つていき間もなくして左へ入る道がある。この旧道は水道の貯水場などがある。この旧道わつてしまっているがだいたい旧状をとどめている。伊藤字氏の裏に出

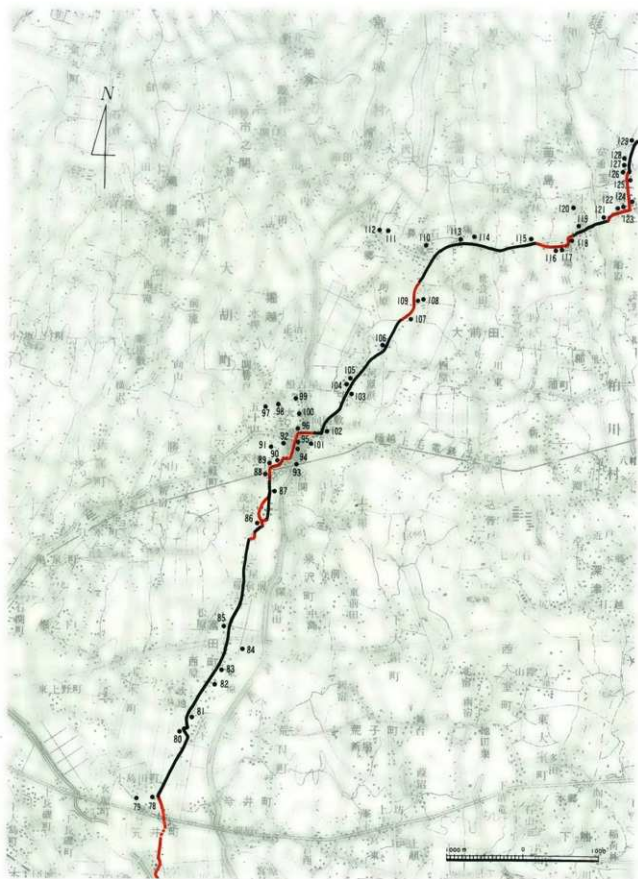
て行くが、ここは日光道との分岐点になっていた所である。舗装道を少し西へ行くと左に沢に下る道がある。川口川を渡りゆるやかな勾配を上つていくと県道にぶつかる。電柱のすぐそばのカーブミラ

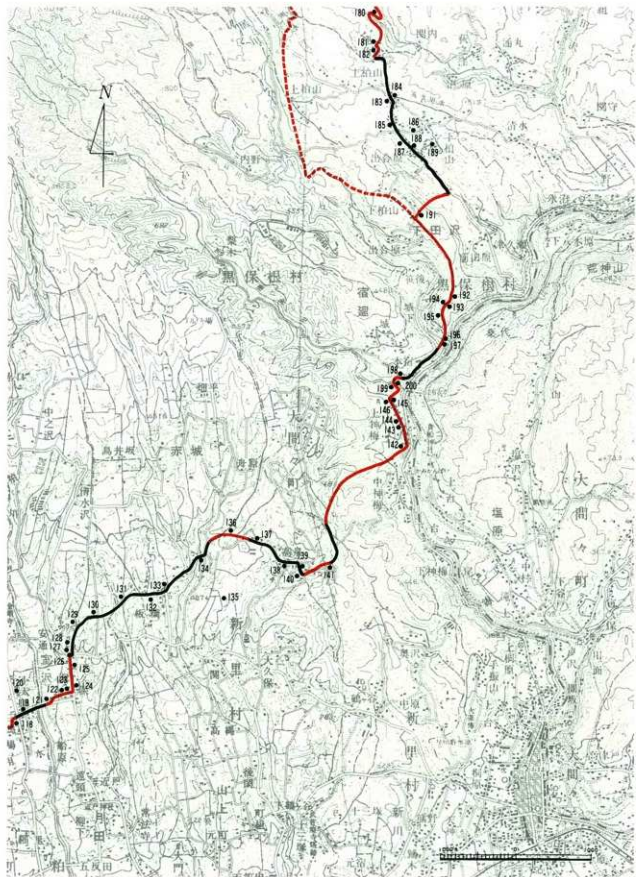
1のあるあたりが現在はかなり断崖になっているが昔は県道と自然に合流していた。そこからは県道を本宿へ出て、田沼村長の家の前の大きなカーブを曲がつてすぐに左の沢に下りていく。沢を渡り、人家の裏を通つてえん堤のすぐ下あたりで深沢川を渡り対岸に出た。旧道は左へ大きく迂回しながら林の中をぬけ上神梅の宿はずれに出る。このあたりも旧状をよく残している。上神梅に出る角の右側に庚申塔が建っているのですぐにわかる。

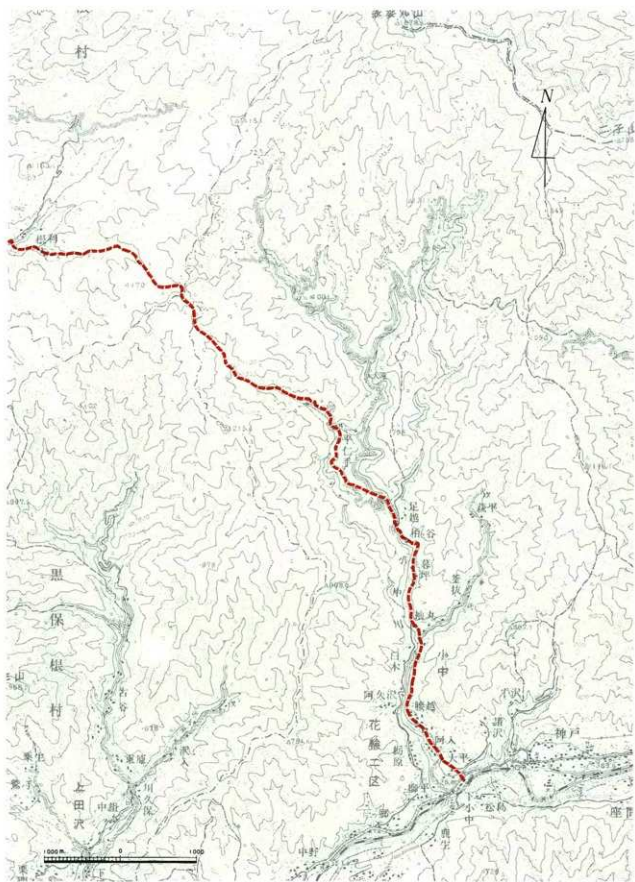




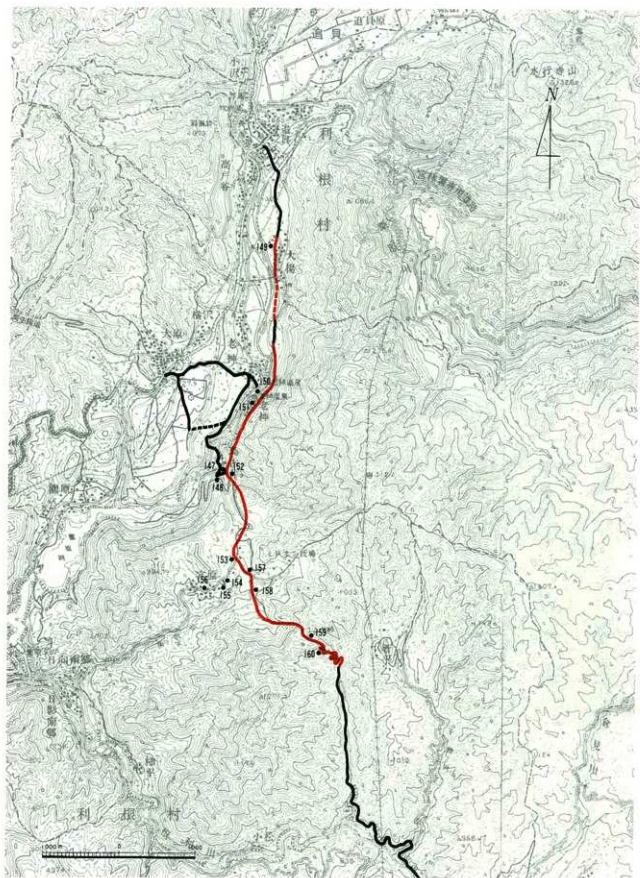
II 道の確定







II 道の確定



Ⅲ、日光への脇往還の現状と文化財

一、日光脇 往還

1 川俣宿から館林城下へ

国道一二三号線の昭和橋のところが利根川の渡しで、往時、富士見の渡しと呼ばれていた。堤防を右に下りたところが、川俣宿である。現在、宿入口の道路西側に本陣がある。堤防が拡張される以前には、本陣の南に数軒の家



昭和橋



川俣日光脇往還 (左の建物は本陣)

があった。その中には、田山花袋の「土手の家」の舞台になった料理屋もあった。この家は、館林駅前通りに移っている。

本陣は、堤防拡張の際、母屋を後ろに引いている。この時、母屋の一部が取りこわされているが、門や塀や天井の高い座敷に往時の面影をしのぶことができる。幕末頃、塩谷新八郎は、横浜に店を持って貿易に従事している。

本陣の道路東にある真如院は、足尾銅毒事件で起きた明治三三(一九〇〇)年の川俣事件で負傷した被害農民の治療が行われたところである。

本陣の北方にある粟島神社は、川俣宿の鎮守として栄えた神社である。向拝柱に「塩谷文造」と刻まれていることから、本陣塩谷家で向拝柱を寄進していることが分かる。

本陣から三〇〇メートルほど行くと、道路の東に川俣宿の間屋がある。道路に面した土蔵と門が往時の面影を残している。



川俣粟島神社道祖神

川俣宿は、かつて間口がせまく、奥行が長い宿場特有の地割であった。しかし、川俣河岸の滅亡とともに、立ちのく家が出てきた。残った家で、空いた屋敷を合わせて一つ屋敷にしている。

III 日光への脇住遷の現状と文化財



伝佐貫氏館跡



谷田川 (旧青柳橋)



青柳竜積寺首軒地藏

かつては、遊女家もあつて河岸が栄えたころには、大変にぎわつていたところである。河岸関係については、「利根川の水運」を参照されたい。川俣には、館林藩の高札所があつたが、位置は確認できない。川俣宿のはずれ、利根加用水にかかる橋が川俣事件の時、警察隊と農民の

衝突があつたところである。川俣宿を出て、五〇メートルほど行くと、大佐貫集落をぬけて、五〇メートルほど行くと矢島集落に入る。北方は低い水田となつていて、現状では、はつきりと館跡と認められるものはない。長良神社の境内に、慶応元(一八六五)年に建立された道祖神がある。この往還では、道祖神は非常に少ない。



川俣宿問屋



川俣宿の民家 (昔のたたずまいを見せる唯一のもの)



川俣宿はずれ利根加用水 (旧上休泊堰)

間て衝突があつたところである。川俣宿を出て、五〇メートルほど行き、国道一二号線を横切る。ここから、二五〇メートルほど行くと、大佐貫集落に入る。大佐貫集落では、道路の東に堀がある。この堀は、四九〇メートルほど続き、東武伊勢崎線の川俣駅向かう道路のところまである。堀が終つたところから、一〇メートルほど行つた西側に長良神社の参道がある。ここを入ると、東に長良神社、西に東光寺がある。この一帯が、鎌倉時代の御家人佐貫氏の館跡と伝えられている。現状では、はつきりと館跡と認められるものはない。長良神社の境内に、慶応元(一八六五)年に建立された道祖神がある。この往還では、道祖神は非常に少ない。

矢島に入つて間もなく、道路東の民家に、永仁三(一二九五)年の銘を持つた阿弥陀三尊の板碑がある。この近辺では見られないなかなか立派なものであり、明和村の重要文化財となつている。そこから一〇メートルほど進んだ西側に観音堂がある。ここには、庚申塔が数基ある。

観音堂から三〇メートルほど行き、長良神社の北にある小川を渡ると、道路の西側に富士山供養塔がある。これは、安政四(一八五七)年に建立されたもので、正面に「富士山供養」と刻まれている。左側面に「ふじの誓掘ひきあげて田うまかな 躰翁」と刻まれている。躰翁は、川俣宿本陣の塩谷新八郎のことである。この塔は、富士登山に向かう途中、一行から遅れ、矢島村で倒れた老人を隣れんで建てられたといわれている。ここは、日光脇往還の一里塚があつたという伝えがある。

小川から北が矢島字通昭寺である。ここで、ゆるい右カーブを描いて国道一二二号線と合流する。本来の道路は、国道を横切つて、片山鉄建株式会社（現 東海旅客鉄道）の東側を通つて、谷田川に来ていた。しかし、昭和三六(一九六一)年頃の土地改良工事で畑となり、こん跡をとどめていない。

堤防から北に旧道がわずかに残っている。川の傍らにコンクリート製の橋杭が残っている。これに「あおやぎばし」と記されている。川の中に橋杭が残っているのが見える。

谷田川を渡ると、館林市青柳である。橋の西にかかって柳の大木があつた。子供五人でもかかえきれなかつたそうである。柳の側に天ぶら屋があつて、脇往還を往来する荷馬車の溜場になつていたそうである。

谷田川の提防を感じて砂利道を進む。往時の道幅は、今より広く道路西側にある日比野家の庭のひばの木まであつた。

約七〇メートル続く砂利道を歩くと、舗装道路が二〇メートルほどある。その先のカマツカ自動車の車置場を横切つて、国道一二二号線と合流する。国道を約一キロほど行き、青柳会館入口脇の小道を西に五〇〇メートルほ

ど行くと竜（龍）横寺がある。

竜横寺の山門脇に、はしか地蔵といわれる地蔵がある。これは、館林藩の青柳刑場にあつたもので、首斬地蔵と呼ばれていた。像の右側に「地藏菩薩以大慈悲若聞名号墮黑闇 元禄二(三)日歳八月 日」と刻まれている。この銘文から、館林藩では刑場を元禄二(一六八九)年には日向から青柳に移していることが分かる。この地蔵は、明治四二(一九〇九)年に刑場跡から現在地に移されたものである。

脇往還に戻り六〇〇メートルほど行くと青柳の信号がある。

この信号を西へ五〇〇メートルほど行つた北側に長良神社がある。この北方一帯が青柳城跡である。明治三二(一八八九)年発行の「邑業郡町村誌材料」に、東西四町(約四三〇メートル)、南北四町四十間(約五〇八メートル)の規模であり、天文二二(一五五三)年大袋城築城まで赤井氏の居城であつ



新宿杉並木跡

III 日光への脇往還の現状と文化財



日光脇往還杉並木 (青柳集落)

いる。

館林にあった旧町名のうち、連雀町、堅町、並木町は、青柳城下にあった町名を伝えている。また、約三百五十軒の民家が青柳から館林に移住したという伝えがある。

元に戻り少し行くと茂林寺入口の信号がある。この交差点を東に約一キロ行くと、分福茶釜で有名な青竜山茂林寺がある。茂林寺は、応仁二(一四六八)年赤井照光の開基といわれる。この寺は、茅葺屋根の伝統を守り往時の原形を保っている。山門の前には、みやげ物屋が軒をつらね、訪れる観光客でにぎわっている。

脇往還に戻り四〇〇メートルほど行くと、青柳駐在所の前で道が二股に分かれる。日光脇往還は、道を右手にとって進む。

青柳駐在所前から数えて、最初の規制標識のある電柱あたりから杉並木があった。杉並木になるところで少し道路が高くなったそうである。この杉並木は、弘化三(一八四六)年の「町方引渡帳」(「館林双書」第九巻所収)によると、宝永年間に植樹されたものである。延長千五百メートルほどであった。道路の両側が杉並木になっていたのは、青柳と並木の終わりの遍照寺近辺であったそうである。おしいことに、昭和三八(一九六三)年に道路拡幅

たと記されている。現在、この辺り一帯は、開発されて住宅地等となっていて、城跡を確認することができない。「仲ノ町」「関ノ町」の地名は残っている。関ノ上は、当時関門があったところといわれて

工事のため伐採されてしまった。

杉並木の始まるころから、約五百メートル東方の畑が館林藩の青柳刑場跡である。当時の面影は全く見られない。

杉並木路を行くとまもなく道路左に小桑原会館入口の看板が見える。ここが密蔵寺の参道である。この寺には、子守地蔵がある。欠損した頭部に空輪がついているので、「首なし子育地蔵」と呼ばれている。その外、六郷地区で最も古い寛文五(一六六五)年建立の二重子庚申といわれる庚申がある。

密蔵寺から、七〇〇メートルほど行き、主要地方道前橋・古河線のバイパスを横切る。ここから、四〇〇メートルほど進み、東武伊勢崎線の踏切を越える。たもなく、左手に入る道角に天保七(一八三六)年に建立された道標がある。しつかりした文字で「富士浅間入口道」と刻まれている。ここから西に約一キロで富士嶽神社がある。

この神社の初山大祭は、五月三二日から六月一日にかけて行われる。参拝者は、毎年六月以降に生まれた子供を連れて近郷近在から来る。子供の額に打出の小槌形の神印を押しもらう。これを「ベツタンゴ」を押しもらうという。掃りに「初山のうちわ」を買ってきて、親類に配る。これは、生まれた子供が無事に成長することを祈願するもので、東毛地方独特の風習である。

元の脇往還に戻り、四〇〇メートルほど行くと、東側に遍照寺の屋根が見えてくる。かつて遍照寺の前まで杉並木が続いていた。

遍照寺は、開山当初明和村大字矢島字遍照寺にあった寺である。榊原康政が天正一八(一五九〇)年に現在地に移し、祈願寺としている。遍照寺には、明治の神仏分離まで、富士嶽神社の御神体であった銅製の「大日如来」の座像がある。この座像は、享保四(一七一九)年に鑄造されたものである。

さらに五〇〇メートルほど進むと、新宿一丁目の交差点である。南向に電泉寺がある。右に行く道が「土河往還」(主要地方道前橋・古河線)である。

少し進んで、鶴生田川沿いに、西に三〇メートルほど行くと、小寺家とともに館林藩の検断であった青山家がある。

青山家には、延宝二(一八七四)年の館林城下絵図などが所蔵されている。旧藩時代には、現在の場所でない、群馬銀行館林支店近くに居を構えていた。

鶴生田川を渡って三〇メートルほど行った毛塚書店前が、旧江戸口門のあったところである。館林の表玄関であるから、五つの木戸口の中で最も立派に造られていたであろうである。門は、明治九(一八七六)年頃こわされたようである。江戸口は、カギの手に屈折していたが、明治二〇(一八八七)年頃に改修されて、真っすぐになった。

城下町の道路は、榊原康政の町割計画によるものといつてよい。日光脇往還の道幅は、七間から八間である。現在の道幅とほぼ同じ道幅である。自動車のない当時としては、広すぎるくらい立派なものである。



館林城下絵図(江戸口附近)

旧江戸口から一〇メートルほどで、館林駅入口の交差点である。東に観光道路を六〇

メートルほど行ったところが館林城跡である。城跡の中に郷土資料館が建てられている。収蔵されているものの中に、安政(一八五五)年の館

林藩の「封内経界図誌」がある。これは、館林領内の村々の絵地図が描かれている貴重なものである。

駅入口の交差点から一〇メートルほど行き、自転車屋の

脇の路地を西に行くと、大道寺と善導寺がある。

脇往還を更に二〇メートルほど行くと、西側に青梅天神がある。この神社は、菅原道真を祭神とする「日本四社」のうちの二社といわれている。寛政六(一七二八)年建立の参道入口の天満宮標柱に、

所謂四社者

- 西 筑前国 飛梅社
- 南 讃岐国 四季梅社
- 北 出雲国 花久里梅社
- 東 当青梅社は也

と刻まれている。この神社は、赤井氏の鎮守であったといわれている。本殿は、春日造りである。

青梅天神から、少し行くと「大辻」である。ここは、道路元標がある。大辻の西南角が検断小寺家の屋敷跡である。

大辻を西に曲がると、千眼寺、観性寺、寛応寺、応声寺がある。大辻から二〇メートルほど行くと、東側が本陣跡である。近代的な商店街となっており、往時のようすは、うかがうすべもない。なお、館林には、脇

本陣は設けられなかった。本陣で取用しきれなかった時は、検断など有力者の家を利用された。問屋は、秋元藩の時は群馬銀行館林支店の東方にあった。大手門の南方である。

本陣跡付近を足利町という。その由来は、「館林記」(「館林町誌」稿所収)に

元亀元(一五七〇)年七月但馬守請取る。御代官として小林彦五郎御出、町屋割立、足利町は彦五郎足利出の人故、住居の町は夫より足利町と名付申候、町人も多分に足利より引越し申候ものに有之候。

とある。このように、長尾頭長が館林城主時代に城下町建設のため足利から来た職人が多く住んだことになんだものである。

III 日光への歸住還の現状と文化財

No	名称	年号	備考
1	本陣跡 真如院		塩谷正邦氏の住居、及び古文書 塩谷路馬頭観音(元治二年)等 塩谷家墓
2	栗島神社		道祖神、 川俣河岸銘水天宮(文政十一年) 土蔵、門
3	問屋跡 脇本陣跡		田山花袋が「土手の家を執筆した家 長良神社、東光寺
4	土手の家 伝佐貫氏館跡	永仁 三年	
5	観音堂 阿弥陀三尊板碑	安政 四年	庚申塔数基
6	富士山供養塔		
7	竜積寺首斬地蔵	元禄 二年	青柳刑場にあったもの

1 川俣宿から館林城下へ

足利町通りを北に進むと、東側に館林郵便局がある。
ここで右折すると、館林城大手門跡である三角公園に行く。左折するのが「古河往還」である。古河往還を西に行くと、常光寺、愛后神社、法泉寺がある。
郵便局のある交差点を北に直進する。五〇メートルほど行くと、東側に熊野神社、法輪寺、法高寺、円教寺がある。熊野神社から少し行つて、舌宿の交差点を西に行くと、五宝寺、長良神社がある。
館林城下の文化財については、「古河往還」に詳述されているので、参照されたい。
台宿の交差点から五〇メートルほどで、旧佐野口門跡である。この門も江戸口門と同じころにこわされたそうである。江戸時代、門の木戸守は、一門につき五名であった。おもしろいことに、木戸守は城付侍であったため、藩主が転封してもそのまま残つて木戸守をしていた。

42	長良神社		分福弁釜の民話
41	五宝寺		子守地蔵、庚申塔数基
40	円教寺		願主板巻与八(谷越町)他
39	法高寺		初山大祭
38	法輪寺		大日如夫座像(享保四年)
37	徳野神社		念仏講(毎週日曜日)
36	法泉寺		青面金剛像(元禄元年)
35	愛弘神社		元検断、館林城下絵図、古文書
34	常光寺		郷土資料館等
33	問屋跡		生田万父祖の墓
32	本陣跡		榊原康政墓(県指定史跡)
31	応声寺		天満宮標柱(寛政六年)
30	覚応寺		十九夜念仏供養塔(明和六年)
29	観性寺		二十三夜塔(天保一四年)
28	千眼寺		安産観世音塔
27	道路元標		館林城鐘(県指定重要文化財)
26	青梅天神		格天共、阿弥陀三尊
25	善導寺		青石地藏板碑(文永一〇年)
24	大道寺		榊原重次の墓(寛永一二年)
23	青山家		青面金剛(寛文八年)等
22	館林城跡		馬頭観音(安永六年)
21	電泉寺		不動まんたら板碑(県指定重要文化財)
20	トウミギ地藏		古兜
19	釈迦堂		
18	遍照寺		
17	富士嶽神社		
16	富士嶽神道入口道標	天保 七年	
15	密蔵寺		
14	杉並木起点跡		
13	茂林寺		
12	青柳城跡		

2、館林城下から下早川田へ

佐野口は、江戸口と同じように、カギの手に屈折していたが、大正六（一九一七）年に、現在のような道路に改修された。



佐野口の坂で、館林に向かって荷を積んだつれづれに馬が坂を上がれずに倒れたという。倒れた馬の供養のために、坂下に天保四（一八三三）年に馬頭観音が建立されている。この馬頭観音は、道標になっている。右側面に「右さの」とちぎ道」と刻まれ、左側面に「左かまひ」と刻まれ、と刻まれている。この道標は、日光脇往還で神社入口のための道標を除くと唯一の道標である。そばにもう一つ天保六（一八三五）年建立の道標がある。正面に「らいで



佐野口坂下道標



足次から下早川田に至る
（日光脇往還の旧道）



下早川田神明宮道祖神

ん道」と刻まれている。この道標は、佐野口門脇にあった茶屋の主人佐野屋長重郎などが建てたものである。この二つの道標は、佐野口から少し行くと道路が二股に分かれる道角にあつたものであるが、道路改修工事のため、現在地に移されたものである。二股に分かれる道を右に進む。約一キロ行くと、右にゆるいカーブを描いて主要地方道行田・佐野線に合流する。合流点の手前北に行く道路が、日光脇往還である。ここは、自動車は一方通行のため入れない。この道路は、道幅が約三メートルで旧状をよく留めている。佐野口から下早川田迄の道路は、榊原康政が慶長二（一五九七）年に貫通させている。ここから、とりせん近くまでは、周囲は水田である。下早川田集落に入り堀を渡って西に八〇メートルほど行くと、下早川田の鎮守神明宮がある。ここには、享保一八（一七三三）年建立の道祖神の石祠がある。かつて早川田河岸の道下分にあつたもので、封内経界図誌に記されているものである。その外、延享三（一七四六）年に河岸側中の七人が建立した庚申塔に、「禁軍酒」と刻まれている。精進の庚申待を裏づけた珍しいものである。道標もある。天保七（一八三六）年に建立されたもので、正面に「らいでん道」と刻まれている。

III 日光への脇住遷の現状と文化財



才川の橋杭跡 (館林藩界)

往還に戻り少し行くと、道路東に享保二(一七二七)年に建立された庚申塔がある。ここを通り過ぎて渡良瀬川の堤防に向かう。堤防の上が際道路路東に、かつて法源寺があった。この石仏は、対岸の靈竜寺に移されている。

堤防を越えると観音坂である。ここには、馬頭観音数基と水神宮がある。ここから四〇メートルほど進むと、矢場川の堤防がある。昭和二十年代後半の河川改修工事で矢場川の流路が付け変えられたものである。橋がないので直接進めない。この辺

が渡良瀬川右岸の早川田河岸跡である。

日光脇住遷は、観音坂に一部残っている道路を直進し、渡良瀬川を渡る。左岸には、足尾毒事件の時、被害農民の集会場になった靈竜寺や、早川田河岸の船積問屋だった二軒の原家がある。

左岸の島ノ内側の河岸を横切る道は、昭和三〇(一九五五)年頃まで残っていたが、河川工事のため姿を消して河原になってしまった。脇住遷は、現在の堤防付近で東に大きく曲がっていた。現在の渡良瀬大橋を渡り終わった地点で才川にかかっていた橋杭の跡が日光脇住遷を示している。才川を渡った右側に館林藩の御分杭が立っていた。これは、木製であるため現在残っていない。この先は、栃木県佐野市である。

下早川田には、館林藩の高札場があったが、川俣宿と同様位置が確認できない。早川田河岸周辺の文化財については、「利根川の水運」を参照されたい。

2 館林城下から下早川田へ

No.	名称	年号	備考
43	坂下道標	天保四年	馬頭観音、らいでん道道標(天保六年)
44	神明宮		道祖神(享保一八年) 禁裏酒路庚申等 らいでん道道標(天保七年)
45	青面金剛	享保二二年	馬頭観音(安政五年)等、水神宮、 足尾毒事件の集会場、 田中正道の墓
46	観音坂石仏群		法源庵寺石仏(新上州銘)
47	靈竜寺		元船積問屋(現当主原次雄氏)
48	原家		高瀬舟の船降ろしの写真
49	原家		元船積問屋四郎 右衛門の子孫(現当主原賢二氏)
50	才川の橋杭		問屋文書。

二、日光裏街道

1 五料宿から駒形宿へ

五料宿から駒形宿までの街道は、日光裏街道(大胡道)と称するよりも、前橋城下より五料を経て、本庄宿の北方で中山道に合流する「江戸道」、あるいは「前橋道」の一部として、よく知られている。また、沼田藩主の参勤交代の街道でもあった。

道の確定の項にも記したように、五料宿、五料関所を経て利根川を渡り、柴宿に至る間は日光例幣使街道に重複する。これらについては、本報告書第二集「日光例幣使街道」、第七集「佐渡奉行街道」及び第十三集「利根川



柴宿本陣前の日光例幣使街道



柴八幡宮

の水運」を参照されたい。

利根川を越し、柴町に入った道は、柴八幡宮の参道を過ぎ、森川商店の角を左に折れて、北に向かっている。柴宿の本陣関根家は、ここから三〇〇メートル東に行った南側にある。建物は昭和四〇六年に解体され、今は本陣の門と老松が街道に面して、残っている。柴町の西のはずれにある八幡宮は、康平六（一〇六三）年源頼義が子の義家と共に創建し山城国石清水八幡宮を勧請したものと伝えられている。戦国末期に焼失し、慶長十八（一六一三）年前橋城主酒井忠世によって再建された。三代將軍家光の時から十石の御朱印状を与えられている。社殿は、幕末と大正一二年に修復が行なわれたが、おおむねそのままの姿をとどめている。この八幡宮は天保年間、利根川の洪水のために現在地に移り、それ以前はずつと西の提防の付近に置かれていた。この時には、駒形へ行く道も今と異なり、元八幡の西側を通っていた。その

ことは、元禄以前のものと思われる前橋領図からも、知ることができる。

泉龍寺は、八幡宮のすぐ北側にあり、長い参道を有している。大同元（八〇六）年の創立と伝えられ、もとは新義真言宗柴崎山玉泉寺と称していた。応永元（一三九四）年に那波城主大江宗真が、白崖宝生禪師を河内国より招き、開山した。（臨濟宗に改宗。応永十五（一四〇八）年には萬松山泉龍寺と改称し、現在に至っている。当時は、多勢の修業僧侶が各地から集まり、北関東における一大道場であったという。白崖は応永二〇（一四一三）年に没した。明兆によって描かれた「白崖宝生禪師画像」は県指定重要文化財として、寺宝になっている。

旧道は泉龍寺のすぐ東側を、北に向かつて走り、県道駒形・柴町線に合流するが、合流する直前の区間約一〇〇メートルは、畑となっている。道は、これより田中を経て駒形へ達するのであるが、寛政十二（七九八）年「伊勢崎風土記」（伊勢崎藩老関重巖著）によれば、下桶越を経た時代もあったことがわかる。

古時殿橋より五料間に過ぎる者は略て下桶越を経たりき。是の故に寶座下桶越に在りしが、近古は路転じて、駒形と今村を経、是に於て寶座も、亦今村に移りぬ。然るに今村賤しくして保ち難く、竟に駒形に讓與せりと云ふ。

（譯文伊勢崎風土記）

昭和四十七年に、宮郷地区の土地改良事業が実施され、県道駒形・柴町線は、従来の曲りくねった道から、道路新設を含む工事が行なわれ、四十九年六月に現在の道路が完成した。この道路は田中集落を経由せず、柴町から稲荷町へほぼ直線が続んでいる。旧道は、県道が田中の南西部で左にカーブしている付近より分かれて、今は田んぼになっっている部分を通り、田中集落の東寄りや南北に通ずる道につながっていた。

田中には集落のほぼ中央に、諏訪神社がある。祭神は健甕名方命、宝徳三（一四五二）年に信州諏訪明神の分霊を祭り、創建されたものである。境内

III 日光への協住遷の現状と文化財



旧名
倭文神社 (伊勢崎市東上之宮町)



今村神社 (伊勢崎市稲荷町)



田中の旧道 (那波郡田中村地籍改正地図より
県立図書館所蔵)

には戦国時代の頃の薬師如来と思われる石仏が、二体安置されている。市の天然記念物であった大榎は、切られてしまっ、今は見るかげもない。田中神社から東へ五〇〇メートルの連取町には、菅原神社があり、境内の連取立

松は、あまりにも有名である。この松は享保十三(一七二八)年に、連取の領主駒井氏の代官を勤めた者が、葦塚の西方より移植したもので、樹齢二百数十年を数え、県の天然記念物になっている。この笠松のかたわらには、「松杉をほめてや風のかをる音」という芭蕉の句碑がある。伊勢崎藩の酒井家に仕えた今村組頭らによつて、建立されたものである。また、上野十二社のひとつとして名高い倭文神社は、田中町の西方東上之宮町に鎮座している。さて、田中に入った旧道は、県道高崎・伊勢崎線を横切り、幅の広い道路となつて北西に向かう。田中大橋を渡つて葦川を越え、三三〇メートル行くと、道はY字路になっている。旧道は、ここを送電線の鉄塔の見える方向へ真っすぐ進んでいたが、耕地整理によつて、すっかりなくなつてしまった。水田の中に新しく建てられた宮郷中学校のあたりを通り、稲荷町の東南部で、県道形・柴町線に合流していた。稲荷町の町内は、昔のままの旧道が拡幅されて、そのまま使用されている。旧道が県道と合わさる交差点を西に曲がり、葦川の下大橋を渡ると、西北一五〇メートルの位置に、今村城跡の碑が建っている。耕地整理によつて往時の景観は全くなくなり、碑の周辺も自動車のスクラップが放置されていて、無残な姿をさらしている。今村城は戦国時代に佐波地方に勢力をもつた、那波氏の居城のひとつで、那波刑部少輔宗俊の築城といわれ、那波氏一族の長浜越前が、城将であつたと伝えられていた。また、永禄年間に赤石城が金山城主田良氏が焼した後は、那波頼宗も在城したといわれる。城の近くに稲荷神社の祠があつたことから、稲荷山城と呼ばれたことがあり、現在の町名もこれに由来している。昭和三十年に宮郷村が伊勢崎市に合併した際、稲荷町と変更され、それ以前は今村と称し、上今、中今、下今に分かれていた。

集落を南から北に向かつて歩くと、白い塀のある大きな通りの家を右に見て、正面に立派な門を有する今村神社が現れる。火産靈命を祭神とし、延宝六(一六七三)年に領主那波氏によつて創建され、はじめは愛后神社と称

していた。明治四十年に、付近の三島・上福荷・飯玉・城福荷・雷電・白山の各神社と、覺后神社が合併し、今村神社となったものである。

神社の前から西に入る道を八〇メートル行つたところには、赤い屋根の天台宗円福寺が見える。創建は応永二(二二九五)年、もとは今村城の南東にあったが、天明年間に現在の位置へ移った、と伝えられている。寺には、県重要文化財に指定された「金剛善光寺式三尊仏」がある。この三尊仏は、近くにあった東円寺が、明治二十四年に廃寺となった際、円福寺に移管されたものである。

また、今村の東方、宮子町地内の県道前橋・古河線沿いには、県指定重要文化財「宮子の笠塔婆」がある。表面に阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の阿弥陀三尊を示す梵字と、阿弥陀如来讃仰の偈が刻まれておりまた背面には、「文永五(寛文)五月二十五日、僧吉阿弥、右慈父聖靈成仏得道、男女教子七人敬白」と刻んである。文永五年は一二六八年であるから、七百余年前に造立されたことが知れる。

今村の旧道に戻り、神社から約五〇〇メートル行くと、左側に南無妙法蓮華經の大きな塔がある。日蓮宗の今妙法教会のお堂があり、祖師堂とも呼ばれている。



六文棒の道しるべ (天保年間)
前橋市駒形町

祖師道前の道を北にすすむと、伊勢崎市と前橋市の境界標識を過ぎ、すぐに県道前橋・古河線に突きあたると、その五〇メートル手前を幅二メートル位の道が横

切っている。これが前橋から駒形を経て伊勢崎、五料へ通じていた旧道の名残で、東へは一〇〇メートル、西へは三〇〇メートルにわたっており、いずれも県道へ合流している。旧道交差点の角には、高さ一五〇センチ、直径二七センチの大きな道しるべが建っている。「南芝本庄道、東京東いせ崎道」とあり、天保□□「寛政五月吉日の文字と、世話人の名が刻まれている。「東京」は当初「江戸」であったと推定され、年号は天保十三(一八四二)年と思われる。この道しるべが六文でできたので、この付近を六文棒というようになった。という言い伝えがあり、この地名はバス停留所の名前に今でも残っている。

旧道交差点を西に折れ、県道に合したところは、駒形六丁目である。そこから駒形十字路を経て二丁目までの間は、旧駒形宿の通りと県道とは、道幅の拡張はなされているものの、ルートは一致していた。

さて、ここで駒形の沿革について、簡単にふれてみることにする。利根川は今の広瀬川、桃ノ木川の筋をかつては流れていたことが知られている。駒形は古くはこの利根川の川原であり、広漠たる原野であった。慶安元(一六四八)年に東善興寺村(前橋市東善町)より数戸が移り住み、この地に新田を開くようになったのが駒形の発祥であるという。四年後の慶安四年に戸数が十四戸となり、三郎右衛門を名主にたてて正式に分村し、日吉山王神を勧請して氏神(駒形明神)とした。宿としては、天和二(一六八二)年に問屋が置かれて馬継所となり、それ以後駒形新田村は駒形駅と呼ばれるようになった。さらに元禄八(一六九五)年に市が開かれ、三と八の日を市日と定めた。享保年間に古着屋、穀屋の旅籠屋もでき、また後に土地の人たちも雑貨商をはじめめるなど、商業活動も活発になっていく。『駒形宿(前橋市駒形町)の開発について』(明和女子短期大学紀要)「駒形の本陣は、名主三郎右衛門宅が兼ねていたが、宿の機能は、問屋二軒による荷物の運送が主であった。」



駒形神社

よつてわかる。境内には伏見稲荷の本殿、太々神楽殿もあり、また双体道祖神、安永二(一七七三)年などを見ることができる。

宿は上町、中町、下町の三つに分けられていたが、明治三年に一丁目から六丁目までの六丁区に改めた。翌四年の資料によると、各丁の戸数は次のとおりである。

一丁目	北側十二軒	西側十一軒
二丁目	同 七軒以上	同 十四軒
三丁目	同 六軒以上	同 十軒
四丁目	東側十二軒	南側十二軒
五丁目	同 十三軒	同 八軒以上
六丁目	同 不詳	同 十二軒

(「駒形町史第三巻」)

明治二十二年の町村合併により、駒形新田村は木瀬村大字駒形新田となり、同三十九年駒形町と改称、昭和になってから城南村を経て、前橋市に合併現在に至っている。

駒形神社は、六丁目から北に向かって行くと、右手に石の鳥居があり、そこから二〇〇メートルほど入ったところに、社殿がある。この神社は、既に記したように日吉山王を氏神としたが、宝永七(一七一〇)年に、小屋原村泉蔵寺より駒形明神を貰い受けて、氏神としたことが、「駒形大明神之覚書」



駒形五丁目から清内橋へゆく旧道

下増田村ヲ経テ安郷村ニ通ズ、北、小屋原村ヲ経テ大胡町ニ通ズ、大正四年十一月建木瀬村第四区青年会、御即位記念」

五丁目より左に折れると、玉村に通ずる。葎川に架かる清内橋の手前に駒形長寿観音堂があり、その一角に子育て地蔵が祭られている。この地蔵はもと橋の向こう側にあつたが、河川改修によつて、ここへ移転された。言い伝えによると、昔からある家に不幸が重なつていた。ある夜その家の田んぼに地蔵様が埋つている夢を見たので、翌日掘りかえしたところ、地蔵様ができたので橋のところに建て、奉るようになったという。

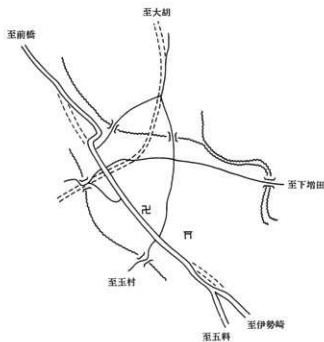
清内橋は、「駒形町広瀬川の支流にあり、長さ四十有五丈」と前橋風土記にも紹介されている。そこから玉村へ至る旧道は、土地改良事業のために、全くわからなくなつてゐる。

駒形のほぼ中央、四丁目に真言宗真業寺がある。江戸表護持院門中の真弁

神社の鳥居から旧道を一六〇メートル行くと、五丁目のバス停留所があり、道路が横切つてゐる。この道が玉村から大胡へ抜ける旧街道である。右へ曲がると、幅四メートル程の舗装道が北へ向かつており、角から数十メートル先の右側には、万延元(一八六〇)庚申十二月の庚申塔がある。駒形幼稚園の脇を過ぎると新興の住宅地が多くなり、送電線をくぐつたところで、駒形より下増田へ行く道と交差する。ここには次のような道しるべがあつたが、今は駒形長寿観音堂に移されている。「東、

法印が、承応二（一六五三）年三月沼田畑葉山へ出向いた折、駒形の名主三郎右衛門宅へ宿泊し、寺を建立することを約束して帰ったという。同年十月に再び駒形を訪れて、お堂を建てて忠持院真乘寺と名付けたのである。万延元（一八六〇）年に駒形の大火があり、このときに本堂は焼失、現在の本堂は大正十三年に再建されたものである。

三丁目と四丁目の境に左へ行く細い道がある。自動車修理工場の脇に入るこの道は、駒形橋を渡って、東善に通じている。旧道沿いに歩くと、ところどころ古い造りの家が残っているが、三丁目の旧駒形郵便局となりの根岸家なども、そのひとつである。そこから少し先の右側には、森本酒店（清



駒形宿の旧道（——は現在の国道）



駒形町3丁目付近の旧道（前橋方面を望む）

酒「正泉」があり、蔵が道沿いに建てられている。森本商店の前身は、元禄（一六九三）年に近江国より移り住み、近江屋の屋号で酒造りをはじめたというから、長い歴史を有している。この地はもとと河床であったから、地下水が良好であるため、酒の醸造には適している。二丁目の叶屋（町田酒造「清味」、柿崎屋（群馬誉））とともに、駒形の三酒屋として名を馳せている。

駒形十字路のひとつ手前の信号を左に入ると、明治四十四年に完成した劇場「駒形座」の建物が残っている。この付近は新駒町と呼ばれ、かつてはにぎわった街で板塀のある古い造りの家を、今でも見ることが出来る。

駒形を横切る県道藤岡・大胡線は、昭和四年頃に完成したが、この県道に並行するようにその数メートル先に、狭い路地がある。左に入れば駒形橋に出て、東善に通じ、右に曲がると、途中で県道を横断し、東に向かって下増田へつながっている。いずれも県道ができる以前の古い道であった。また、県道十字路より二五〇メートル先にも古い道が分岐しており、それは広瀬川を上橋で渡ったあと、今の国鉄駒形駅西側で、大胡へ行く旧道に合流している。現在駒形から前橋方面へ行く県道は、直線で上大島町方向へ進んでいるが、このようになったのは、昭和十五年頃のことである。それ以前は、一丁目の前橋成形樹胎工場のところを右に曲がり、一四〇メートル行つて今度は左折、今は田んぼ道となつているところを通

III 日光への歸住還の現状と文化財

2 駒形宿から大胡宿へ

駒形五丁目から北に曲がり、下増田へ行く道をクロスした大胡道は、その

No	名称	年号	備考
51	常業寺		境内に二十三夜塔の道しるべ(天保十五年)あり。
52	五料関所跡		門の礎石と井戸が残る。
53	飯玉神社		大杉様
54	柴宿本陣跡		臨濟宗、無住の寺
55	未福寺		県重文、白崖宝生禪師画像。
56	柴八幡宮		
57	泉龍寺		
58	眞光寺		
59	諏訪神社	江戸後期	菅原神社境内にあり、連取の笠松上野十二社のひとつ
60	芭蕉の句碑		
61	倭文神社		
62	今村城跡		
63	今村神社		
64	円福寺		
65	宮子の笠塔婆	文永五年	県重文、文金銅光寺式三尊仏
66	今妙法教会	日蓮宗	県重文
67	道しるべ	天保年間	南芝本庄道、東京京いせ崎道
68	駒形神社		
69	庚申塔	万延元年	
70	駒形長寿観音堂		子育観音
71	眞業寺		
72	茂兵衛地蔵		
73	琴平神社		

五料宿から駒形宿へ

って、山王団地入口の道路付近で県道に合流していた。旧道の北の端には、琴平神社が祭られている。



小屋原町駒形駅西側の旧道

あとすぐに駒形バイパスによって、寸断されてしまう。このバイパスは、県道前橋・古河線の交通渋滞を解消するため、前橋市上大島と伊勢崎市田中島との間で、昭和五十年九月に開通した。バイパスの地下道と、新広瀬橋で寸断区間をう回し、再び旧道に出る。『前橋風土記』によると、小屋原村広瀬川に二つの橋が記されている。ひとつは「上橋」で、これは今でも名が残っており、駒形一丁目から小屋原への途中にある。もう一つは「五料道橋」である。「長さ四十有八丈、五料の道路なり」とあり、

新広瀬橋の前身と考えられる。

旧道を北に進むと、国鉄阿毛線をまたぐ県道の陸橋が正面に見える。昭和四十九年十一月に完成したこの陸橋の工事で、踏切付近の道路はすっかり変わっている。駒形駅は明治二十二年(一八八九)年十一月、阿毛線開通と同時に開業し、木瀬・荒砥・上陽村住民の足となって重責を果たしてきたが、道路交通事情の変化により、貨物の取扱をやめてすでに久しく、また駅業務もかなり縮小されている。

駅の北側を東西に道が貫いており、上増田と上大島等を結んでいる。上大島の方へ七〇メートル入った右側には、荒神様の塚があり、その西方には泉蔵寺(天台宗)がある。

群馬郡下公田村黎明院末流ナリ創立年暦不詳往昔開山ハ蓮性上人ト云年暦不詳中興開山ハ寛永二乙丑年順慶和尚ナリ(『上野国郡村誌』「小屋原村」より)

自動車で県道を走ると、陸橋を降りたところで、道は左にカーブしている。このとき、正面に狭い道が真つすぐに通っているのが見える。これが旧道で送電線の下を通り、Y字路のところは左に進んで、筑井小学校の西側に出ていた。西方の田んぼの中には、稲荷神社の森が見え、東方三〇〇メートルのところには薬師様がある。

筑井小学校の西には墓地があり、文化元（一八〇四）年の六地藏などが見られる。小学校の裏に近戸神社があり、旧道はその西側を通って、桃ノ木川の堤防に突きあたる。十数年前前に河川改修が行なわれて、今の川幅になったが、それまでは今の三分の一位の幅で、旧道はその川に沿って少し北へ行き、筑井大橋の三〇メートル程上流付近で、桃ノ木川を渡った。この橋は大橋と呼ばれていた。再び川に沿って北へ走り、小屋酒店の角を右に曲がり、筑井の集落の中をS字形に通って、小さなY字路に出る。そこを右に行くと、



筑井町から小島田町へ通ずる旧道跡

農業用水路の橋を渡り、北へ向かう直線の道ができていた。旧道はこの道と一致し、道が耕地整理のため途中からなくなっているが、田んぼの中をやや右に曲がって進み、小島田集落の東南端であづま道に合している。あづま道に合した旧道は、左に曲がってガードレールのある細い道を六〇メートル程走り、ここであづま道から分かれて、右折する。プロット塀にはさまれた狭い道は、すぐに国道五〇号線に達する。旧道は国道を横切り、少し広い道となって左に

と一致して、大胡に向かっていた。

駒形十字路から県道を二六〇メートル北へ行き、左折して六〇メートル入った左側に、市指定重要文化財「仁治の供養碑」がある。高さ二二四センチの安山岩で、上部に阿弥陀如来坐像が半肉彫にされ、その左右に観音と勢至の種子が彫られている。下部には五行の銘文と、仁治元（二二四〇）年の紀年銘等が刻まれている。一般板碑とは石材や形式が異なり、鎌倉時代の板碑の原型をもつものとして、注目されている。

小島田の西方、古利根川の段丘上に石造物の並んでいるところがある。あづま道の旧跡に位置し、そのなかに二つの道しるべが見られる。百番供養塔の台石に刻まれたものは、「右いづ流道、左日光道」とあり、栃木県の流出山を教えている。もうひとつは、石地藏尊の蓮弁に彫られ、「右二ノ宮、左大胡」「宝永三年拾貳月吉日」とある。二二年は四年のことで、一七〇七年にあたる。かつてはここがあづま道から、日光裏街道への分去り辻であったことがわかる。

小島田から北に向かう県道は、旧荒砥村の富田に入る。道は前橋市農業総合研修センターの東で、大泉坊川を渡るが、この付近の旧道は県道と一致していない。県道の橋の手前で左に入って、川の西側を数十メートル走り、研



小島田町百番供養の台石に刻まれた道しるべ

やカーブしながら、三〇〇メートルで県道藤岡・大胡線に達する。正面には前橋東高校の白い校舎が、よく見える。ここから先は、今の県道

III 日光への脇住還の現状と文化財

修センター北側の道路によつたところ、東に折れ、川を渡って今の県道と一緒になっていた。古い橋の名を木舟橋と云い、少し北に寄った田んぼの中に、木舟様と呼ばれる石祠があった。また、木舟橋のやや南で、女屋へ行く道などが分岐していたが、そこにあつた大正時代のものと思われる道標が、前記の石祠と共に、研修センター東側の路傍に移されている。

そこから八十メートル北で、東南へ下る道が分岐する。今井に通じる道で、草むらの中に道標が建っている。

県道を大胡に向かつて進み、右側に民家の現われたところを左にゆるくカーブし、また右にカーブする。そこ地点を「女堀」の遺構が横切っていた。「女堀」は、赤城山南麓を東西に結ぶ用水堀跡で、前橋市上泉町付近で、旧利根川から取水し、佐波郡東村西国定に至る約十二キロである。古代末から中世初期にかけての土木工事として、注目すべき遺構である。大胡道から見る現状は、西側部分においては、早い時期に耕地整理が行なわれたためか、ほとんどわからず、東側は、耕地整理が済んではいないが、低地に帯状の水田があり、その跡を知ることができる。

女堀の北側に沿って細い道があり、県道との交差点に通じるべがある。「東荒口ヲ経荒砥村役場、南木瀬村駒形町道、西江木ヲ経前橋市道、北大胡道、富田青年会」とあり、江木から荒口に通じる古い道が、ここで横切っていたことがわかる。現在の拡幅された自動車道は、そこより一三〇メートル北方に設けられている。

両側に農家の建つなかを、ゆるやかなカーブをくりかえしながら進むと、右側に富田中央公民館がある。そこを東に入ると、天台宗正法院があり、その参道の南には「北向観音堂」がある。正法院は「持地山延命寺正法院」と



三柱神社の堅牢地神文字塔



富田十字跡より大胡へ向かう道



大胡町茂木（小林）地内の旧道（南方を見る）



富田町馬頭大士の文字塔（天保3年）

称し、阿弥陀如来を本尊としている。天保十三（一八四二）年火災にあい、創立年代やこれに関する記録は不明であるが、後に明幾上人によつて再興され、現在の位置に移された。ここには元西雲山浄土院阿弥陀寺があつたが、明治十年十二月に合併してこれを廃し、正法院と改称した（「荒砥村誌」）。ま

た境内には赤城塔を数基みることができ。

正法院から二〇メートル北には、大きな一本松のある三柱神社が鎮座している。赤城神社、大穴牟禮神社、天尾屋根命で、明治十年十月に稲荷神社、赤城神社、春日神社の三社が合併し、三柱神社と改称した。社殿の裏には、「堅牢地神」(行妙書)の文字塔(高さ九〇センチ)が建てられている。

県道今井・前橋線の富田十字路を、四〇メートル過ぎた点で、東に入る道を二〇メートル行くと、穴栗師墓地があり、如意輪観音像の「二十二夜大悲塔、安永三(一七七四)年」、「庚申塔、明和七(一七七〇)庚寅記」などが集められている。また、十字路より三五メートル北の左側、畑の隅には「馬頭大士」の文字塔天保三(一八三二)辰年八月五日がある。

前橋市の境界を抜けて、大胡町茂木に入ると、しばらくして県道は右にカーブする。このカーブの地点は、県道の右側に狭い旧道が、一〇〇メートルほど存在する。坂を下って小さな川を渡ったあと、旧道は左の細い道に入り、数十メートル進んで右に折れ、農家の石垣の前を通って、再び県道に合流していた。旧道の左手には、産土様がある。県道に合した旧道は大正用水を渡り、東小路と呼ばれる集落を過ぎて、大胡へ向かっている。一方、産土様の東側で右に折れず、そのまま狭い通りを直進する通りを、西小路と呼んでいる。こちらも旧道であったが、県道として拡幅される時に、東小路が選ばれたので、西小路は昔ながらの道幅である。両者は円城寺の西で合流する。

明治十年頃に編さんされた「上野国郡村誌茂木村」によると、「大胡ヨリ駒形道北東方大胡町界ヨリ南方富田村界迄、十七丁四間三尺幅三尺」と、当時の模様を記している。

円城寺は阿弥陀如来を本尊とする天台宗の寺で、天長五(八二八)年に慈覚大師が創建した、と伝えられている。寛永年間と明治七年の二回火災に会い、由緒などは不明で、現在の本堂は昭和三十二年に建てられたものである。

その円城寺の裏を大胡バイパスが通る計画で、県道から西側の部分はほとんど完成している。

工事中のバイパスを左に見たあと、県道は右に大きくカーブする。旧道はここで県道と分かれて左の細い道に入り、住宅分譲地の東を通って、大胡駅南側にある農協倉庫のところに達していた。倉庫の前には次のような、高さ四〇センチの道しるべが建っている。

「西前之橋道、南駒形道、東大胡大間々道、北堀越市之間道、御即位記念茂木青年会」

旧道は倉庫から、その北の上毛電鉄大胡駅の構内を横断し、駅前の道へつながっていた。中央前橋駅から大胡、大間々町を経て西桐生に至る、上毛電鉄が開通したのは、昭和三年十一月十日のことで、大胡駅の建設に伴い、道路は東を迂回するように、変更されたのである。駅の西方には、曹洞宗長興寺がある。天正十八(一五九〇)年、

牧野侯の家老稲垣長茂が、天室伊弉大和尚に請うて開山した。山門の前には、高さ一二〇センチ程の供養塔があり、三界万霊の供養、観音、地藏の信仰と通じるべを兼ねている。

「東三界萬霊、南百番観音・伊勢崎道、西番光寺道・前橋道・妙義道、北地藏菩薩日光道」

この道しるべは、大胡から伊勢崎へ行く道の踏切の南側角にあったが、後に山門の入口に移動したという。大胡駅前の道を、北に一〇メートル程行ったところに、文化十三



大胡駅構内を横切る旧道

III 日光への脇住還の現状と文化財



大胡駅前馬頭観音(文化13年)

(一八一六)年に建てられた、馬頭観音がある。これは馬にまたがった観音様を、右柱に浮き彫りにした像で、台石を含めた高さは三メートルを超えるという、立派なものである。

また、その像の後には、皇太子殿下御成婚記念の馬頭観音碑(大正十三年四月、長塚球善書)がある。古来から駅伝というものがあり、これは今の運送業である。馬の背や馬の足によつて栄えるものである。これを仏教信仰では馬頭観世音として表わす。(原漢文)と書いてあり、馬頭観音への信仰の深さを物語っている。

馬頭観音の西側の高台は神明様の跡地で、今は児童遊園地になっている。

「救世聖徳太子、嘉永三歳在庚戌晩春日」と彫られた、高さ二九〇センチの大きな碑には、台石に「綿講中」の文字があり、綿の生産と流通が、大胡町で行なわれていたことがわかる。

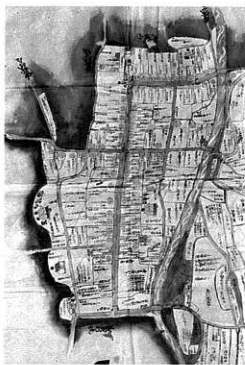
駅前の通りをそこからさらに二〇メートル進み、左に折れて一八〇メートルのところには、天台宗の満善寺が、左折せずに直進したすぐ左側には、日蓮正宗の本応寺がある。この通りには、大胡城跡の堀を通ってくる用水(虎が関用水)が沿っているが、今はコンクリートのふたをさされて歩道になり、味気ないものになっている。

さて、駒形・大胡道はこの馬頭観音の前を右に曲がり、五〇メートルで大胡宿(下宿)に達している。この間は先の用水もコンクリートのふたから開放されて水の流れを見せ、県道を横切つて、荒砥川に注いでいる。大胡宿の南はもと丁字路になっており、西へ行くと駒形・五科道、東が伊勢崎街道で

あった。今では駒形は南へそのまま直進するようになり、伊勢崎街道も旧道より数メートル北側で、東に分岐するようになった。伊勢崎への道に入り、荒砥川の宮関橋を渡ると、すぐ右に「昭和水難慰霊観世音」の像が建っている。昭和二十二年のカスリン台風による水難者の霊を慰さめるもので、同年九月十五日荒砥川の濁流が大胡町を押し流し、七十二人の死者と二百五十七人の重軽傷者数を数える大被害であった。伊勢崎へ向かう県道は像の前を過ぎ、踏切を渡つてそのまま直進するが、旧道は踏切の南で右に曲がり、荒口町と荒子町の中間を通つて、二之宮から伊勢崎に達している。

大胡宿は日光裏街道、伊勢崎街道のほか、赤城(三夜沢)街道、米野街道や産業街道、前橋街道山上街道が通じており、多くの旅人の往来で栄えていた。江戸時代前期の貞享元(一六八四)年九月に編集された『前橋風土記』は、大胡町の様子を次のように記している。(原漢文)

本町 古城の東に在り。道南北に通ず。北は上宿と名つけ、南を下宿と曰う。市有り、三八の日を期となす。群商ここに聚る。



大胡宿(勢多郡大胡宮関村地租改正地図より)

県立文書館所蔵



大胡宿 (県立文書館所蔵多都大胡宮園村地租改正地図より作成)

曲折す。古城に到るの道路なり。

裏町 比びて本町の東に在り。而して本町に比ぶ。北は上宿に列り、南は下宿に通す。商と農と厩を接せり。

右、大胡の坊街なり。

宿場は中央に水路が通っており、洗い場や馬の水呑み場となっていた。この風景は大正時代まで見られたが、今は道の東側に寄せられ、コンクリートで覆われている。この水路がいつできたかは明確でないが、江戸初期に牧野氏が入城した時には、既にあつたことが知られており、大胡神社東方の湯沢川(荒砥川)から取水したものと考えられる。牧野氏は後に、大胡城の本丸の西一二の丸の三の曲輪をめぐる虎が堰用水を作り、その流れは今でも良く知ることができる。

市は、三と八を市日とする六斎市が、中宿及び上宿で開かれ、近在から人々が集まってくるにぎわいを見せていた。

現在の大胡宿は、水路もなくなくなり、また古い造りの家々も姿を消して、自動車の盛んに行きかう通りとなり、道路の形態と地割りに往時をしのばせるのみとなった。宿のほぼ中央、前橋からの道と交差する中町の自転車店前には、文化六(一八〇九)年に建てられた彫りの深い立派な連星のべがあつて、町指定史跡になっている。

町指定史跡になっている。

「東 文化六己巳六月 世話人奥泉文平、江原忠兵衛」南 五科伊勢崎「西前橋米野」北 日光大間々」

交差点の角から一軒先の左側には、現在大胡町では唯一の旅館である「美濃屋旅館」がある。今は近代的なコンクリートの建物であるが、一〇年程前までは天保年間に建てられたという、木造二階建ての古い店舗構造をしていた。そこより八〇メートル北で、宿は右に折れる。その角は

大胡宿下宿より北を見る



明治初年に大胡郵便局が置かれていた。突きあたりには、町の神さまである八坂神社があり、祇園の神、市場神である。昭和四十二年に、コンクリート造りの社殿に改築され、街を見守っている。神社



大胡宿中宿の道しるべ (文化6年)

明治初年に大胡郵便局が置かれていた。突きあたりには、町の神さまである八坂神社があり、祇園の神、市場神である。昭和四十二年に、コンクリート造りの社殿に改築され、街を見守っている。神社

III 日光への歸住還の現状と文化財

荒砥川は江戸期の頃は「湯ノ沢」と呼ばれており、赤城山荒山にその源を発し、伊勢崎市の西方で広瀬川に合流する。ここに架かる橋を今は大川橋といっているが、『前橋風土記』では、「赤城山湯沢の水に跨る。長さ二十有四丈。桐原の道路なり」と記している。その大川橋の上に立って、西北方をふ



大胡上宿 (太川橋の西方より西を見る)

入ると、北側に七ツ星醸造店がある。もと竹内酒造店といふ安政二(一八五五)年の創業で、戦時中一時廃業したが、戦後現在の社名となつて、君乃松という清酒をつくっている。神社前の交差点より七〇メートル東に入ったところで、南に入る細い道があり、これが裏町である。そこを一七〇メートル下ると、西側には真宗本願寺派の勝念寺がある。文禄三(一五九四)年の開基で、室町時代初期の作と推定される阿弥陀如来像をまつている。



大胡町里程基点 (大胡町公民館前)

の西には大胡町公民館があり、その前に高さ九三センチの石標が建っている。大胡町里程基点、御即位大札記念、大正四年十一月、大胡町青年会第一支部」とある。

角を曲がって上宿に



大胡町長善寺。大胡太郎の墓

城跡の東側は土砂崩壊防止の工事が行なわれていくのは残念である。倒され、その面影が失なわれていくのは残念である。

根古屋集落を形づくっている。中央部の小高いところを本丸とし、樹形門や空堀の跡が残っている。城主は中世における大胡氏と、牧野氏の二つの時期があつた。牧野康成は三河国出身で、徳川家康が関東に入国した天正十八(一五九〇)年に、大胡藩二万石に封ぜられた。慶長十四(一六〇九)年に忠成が後を嗣ぎ居城したが、元和四(一六一八)年に越後国長岡藩へ転封され、廃藩となつた。その後の大胡は、前橋藩の支配下に入り、大胡目付が管轄した。



大胡神社入口の道程神

り返ると大胡城跡が望まれる。大胡城は赤城山南麓の丘陵地を利用した半山城で、城跡は北の大胡神社から町役場の東四と曲輪に至る間に堀を設け、東側は荒砥川を利用し、城との間に

2 駒形宿から大胡宿へ

No	名称	年号	備考
74	泉蔵寺		天台宗の寺
75	稲荷神社		
76	薬師様		
77	近江神社		
78	仁治の供養碑	仁治元年	市指定重文 百番供養塔に刻まれている。他に石地蔵の道しるべあり。
79	道しるべ	なし	
80	木舟さま		付近に大正期の道標がある。
81	女堀の遺構		天台宗の寺、境内に赤城塔。
82	正法院		
83	三柱神社		
84	二十二夜大悲塔	安永 三年	穴薬師墓地にあり他に庚申塔など
85	馬頭大士文字塔	天保 三年	
86	産土さま		
87	円城寺		
88	道しるべ	大正期	大胡駅南側の倉庫前にある。
89	道しるべ	なし	長興寺の山門にあり。
90	馬頭観音像	文化十三年	他に馬頭観音像など
91	満善寺		
92	本心寺		
93	昭和水権惣堂観世音		昭和二十二年のカスリン台風慰霊像
94	勝念寺		
95	道しるべ	文化六年	大胡町中町の角にある町指定史跡
96	八坂神社		そばに大胡町里程基点標がある。
97	大胡太郎の墓	江戸初期	長養寺にあり(町指定史跡)
98	養林寺の山門		他に大胡城主牧野康成の墓がある(町指定史跡)
99	大胡神社		
100	大胡城跡		樹形門跡、から堀などが残る。
101	石尊大権現		

3 大胡宿から室沢宿へ



大胡町河原浜の双体道祖神



大胡町河原浜(現大胡町向町)の道しるべ

荒砥川にかかる大川橋を過ぎるとゆるやかな上りとなり、一〇〇メートルほどでY字路の信号のところにでる。ここは大胡町向町と呼ばれ、上に真直ぐ「大間々一キロ」、左「宮城村三キロ」の標識が見える。このY字路の角のエバラ化粧品店前下方はほとんどコンクリートに埋め込まれた高さ六五センチほどの道しるべが建っていて、「右桐生・大間々」「左日光」と刻まれ、大胡道は左手つまり北へ折れることを教えている。よく見ると、立派な道しるべであるが残念ながら年号が入っていない。「道しるべ」(萩原進著、みやま文庫)によると、江戸末期の嘉永年間に博徒の親分大前田栄五郎が衆人のために建立したことがわかる。折えるままに左手に折れると、ゆるやかな上り道が続く。右に左にカーブしながら先ほどの道しるべから七〇〇メートルのところまで道は二つに分かれるが、その手前右に知久弥助翁の碑(昭和九年建立)と弥助地藏尊(昭和十三年建立)の二碑が建てられている。東京から来てこの碑の向い側に住

みついた弥助いさんは、明治・大正年間に取り草（野草）で病気を直すためまわりの人から「お助けいさん」と呼ばれ、県内ばかりか近県各地からも病人が集まってきたという。

分かれ目のところ（小林商店前の空地）に自然石の中に牛肉彫りされた双体道祖神がひっそりと建っている。自動販売機の陰にあるためうっかり見逃してしまいがちである。よく見ると、文化九（一八二二）年建立とあり、残念ながら顔は白いエナメルらしきものでいたずら塗りされているが、男神は大きな杯、女神はちようしを持ってほほえましく行きかう村人に親しく呼びかけているようである。台石はほとんど埋まっているが、掘ってみると正面左側にかすかな字で「左阿かき」と刻まれ赤城山と赤城神社を教える道しるべになっている。

ここから一〇メートル近く北で、火の見やぐらと消防小屋の東の小高い丘には庚申塔群が見られる。欠けたのが多く保存もよくないが、三〇基ほどあろうか。その中でも丘の中央にそそり立つ万延元（一八六〇）年の庚申塔は高さが二・五メートルほどある立派なものである。また、古いものとして宝暦六（一七五六）年建立のものが見られる。

大胡道は小林商店前をやや右にカーブし、ゆるやかな上り道になる。このあたりはまわりに比較的新しい家が目につく。やがて、右に左にカーブして八〇メートルほどで能満寺川の橋を渡って宮城村に入る。村に入ると道を左手の下の畑の中にかぶと石が見られ、縄がかけられている。宮城村に入ってから六〇メートルほど直進すると道は二つに分かれ、旧道は道幅五メートルほどの右に入る道となる。右に入って一〇〇メートル余り進むと右手に墓地が見られ、その中央に文政三（一八二〇）年建立の地藏様（地藏菩薩）が建っている。旧道は南からきた道に合流して左手北にカーブする。墓地から北へ一五〇メートルほど進むとT字路にでる。ここには南面した立派な自然石の庚申塔など三基が見られる。一番右は上部に日天月天を配して庚申塔という文



宮城村の兜石



鼻毛石の赤城寺西の墓地の石仏郡

字を雄大に刻んだ総丈一五八センチの大きな塔だけに見えがする。裏には弘化三（一八四六）丙午年十一月吉の年号がある。また、台石がずんぐりしかつこうがよく、正面に「右のみち」「左日光みち」と筆太に書かれた道しるべになっていて、左は日光への道（大胡道）を教えている。左に元治元（一八六四）年の大黒天と万延元（一八六〇）年の庚申塔が建っている。旧道は真直ぐ北に上る。三〇〇メートルほどで前に分かれた大胡道に合流する。現在この道は県道上神梅・大胡線と呼ばれ、四〇〇メートルほどでT字路にでる。近くには村役場があるからこのあたりは鼻毛石の中心地となっている。でた突きあたりが村立宮城小学校になっている。小学校のすぐ西には四ツ塚古墳があり、上は今が宮城村英霊殿になっていて、彰忠碑などが建っている。歩いてみると、南の古木の下に高さ八〇センチほどの碑が建ち、四ツ塚古墳と刻まれ、ここが古墳であることを教えている。

小学校から西に七〇メートルほどのところに真言宗赤城寺がある。本堂西の墓地の一番北に左から右へ、木で作った小屋の中に入っている六地藏石塔、地藏菩薩、北爪将監供養塔の三塔が並んで建っている。六地藏石塔は「宮城村誌」によると、高さ五二センチ、幅二〇・五センチの凝灰岩で作られ、鎌倉時代建立と推定されている。地藏菩薩は高さ三メートル近くある巨大なもので、頭や手が欠けて下に置かれているのが残念である。よく見ると台石に宝曆九（一七五九）年の銘が入っている。北爪将監供養塔も高さ三メートル余りと巨大でなかなか見ばえがする塔である。建立は古く、享保一（一七二六）年の銘が入っている。なお、六地藏石塔と将監供養塔の二つは昭和五三年四月指定の宮城村指定重要文化財となっている。

赤城寺前には鼻毛石公民館の西には安政七（一八六〇）年の庚申塔と享保六（一七二一）年の南無三界万靈塔が建っている。

宮城小学校前は大胡道は右に折れ、五〇メートルほど室沢方面に進むと、左手に立派な墓地が見える。このあたりは鼻毛石字一本木と呼ばれるところで、墓地入口左手に宝曆六（一七五六）年の馬頭観音が建ち、奥に昭和五三年四月指定の宮城村指定重要文化財になっている板碑が見られる。プロックの小屋の中に板碑二基が建てられ、右かたすみや手前には欠けた板碑



馬場の念仏橋供養塔
天保3 (1832) 年建立



室沢の長崎大地蔵尊

数基が放置されている。「宮城村誌」によると、建立は宝町初期の貞和（一三三九）年であることがわかる。さらに奥には宝曆六（一七五六）年の如意輪観音と刻まれた文字塔や中世の五輪塔七基が墓石といっしょに集めて、建てられている。

この墓地から大胡道は東に直ぐ進むと、一〇〇メートル近くで神沢川にかかる鼻毛石橋を渡るが、渡る手前左手に神沢川に沿う一メートルほどのじゃり道を上っていくと一五〇メートルほどでササの中に石割三基が南向きにひっそりと建っている。それぞれ建立は宝曆五（一七五五）年、宝曆六（一七五六）年、明治八（一八七五）年とわかる。

鼻毛石橋から東北東に八〇メートルほど進むと、大胡道はいよいよ屋敷堂の少し手前で県道と神梅大胡線から分かれ東方に進む。

県道から分かれる手前で、南の大前田から北の苗が島への道を横切ると左の角に土に埋れた道しるべを見つけることができる。「東馬場、室沢、月田」「西鼻毛石、宮城、柏倉」「南大前田、□□」「北縣社、赤城」とあり、文字からして大正年間の青年会による建立であろうか。

県道から分かれ東方方向に進む旧道は舗装されているが道幅が急に狭くなり、三メートルほどの道となる。このあたりの道は旧道らしさが幾分感じられ、左側に石垣がよく目につく。赤城の南面を東

西に走っているためであろう。少し行くとも民家が現われ、やがて小さな沢を渡ると右下沢沿いに六〇センチほどの天保三（一八三三）年建立の念佛橋供養塔がひっそりと建っている。よく見ないとうっかり見過してしまいうさうである。ここから一〇メートル先の電柱の下に道しるべが倒れたまま放置されていた。「東室澤、神梅、日光」「西鼻毛石、柏倉、大胡」「南月田、山上、大間々」「北苗

III 日光への脇往還の現状と文化財

々島、赤城」と刻まれ、大正六（一九一七）年馬場青年会の建立とある。やがて、県道と分かれて六〇〇メートルほど来ると右手に大きなミラーがあり、ここを左折し五〇〇メートル近くで県道に合流する。一〇〇メートル進むと馬場の十字路にでる。でる右手長岡佳氏宅の敷地内に高さ四メートル余りの常夜燈が建っている。案内板に「宮城村指定重要文化財大燈籠」とあり、なかなか見ごたえのある立派な常夜燈である。よく見ると、天保二（一八三二）年の建立で、「信州伊奈手良郷中坪村石工中山庄左衛門重安」と刻まれ、伊奈（高遠）の石工によるものとわかる。

この十字路から大胡道を東へ一〇〇メートル近く進むと左手北側の吉川商店の東すみに高さ六メートルほどの巨大な馬頭観世音が見られ、見るからに圧倒されてしまいそうである。現在宮城村指定重要文化財（昭和五三年四月指定）になっており、宮城村教育委員会の話しによると建立は天保年間だろうだ。

ここから北三〇〇メートルほどに村社稲荷神社がある。鳥居手前右手に台石も入れて三メートル余りの立派な背面金剛像があり、建立は宝暦六（一七五六）年で、信州高遠領荒町村石工十右衛門の名が見える。現在この像は宮城村指定文化財（昭和五五年四月指定）になっている。そばには珍しい笠をかぶっている一五メートルほどの道徳神が建ち、これも宝暦六（一七五六）年建立となっている。境内には天明三（一七八三）年や寛政二（一八〇〇）年の庚申塔、天保三（一八三二）年の鬼子母神などが見える。

馬場の十字路から三〇〇メートルほどで粕川の協和橋を渡り粕川村に入る。橋から二〇〇メートルで県道から分かれ、大胡道は北側に入るようになる。途中明和二（一七六五）年建立の大変きれいな長崎大地蔵尊が見られる。北側に入った大胡道は舗装されているが、道幅は狭く三メートルほどになり旧道の面影をよく残している。やがて、右手に折れ大きな民家の裏をカーブして山伏川にかかる橋にでる。渡るとすぐ左手に五輪塔、馬頭観音二基、

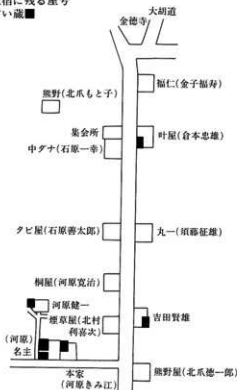


室沢宿（南から北を見る）

弁才天が川の流れを見下ろすようにひっそりと建っている。ここから左側に立派な石垣を見ながら二〇〇メートルほどゆるやかな傾斜を上ると県道にでる。大胡道はここを左折して北に進む。県道にてたところから北の全徳寺入口までの五〇〇メートルほどが室沢宿である。

だから上り坂がいかに宿場を思わせる室沢宿は赤城南面の中間といった感をいだかせるところに位置している。現在の室沢宿は県道上神梅・大胡線沿いに南北約五〇〇

室沢宿に残る屋号と古い蔵



室沢宿に残る屋号と古い蔵



室沢宿北はずれの辻と全徳寺を望む

室沢宿の家並を通り抜けると全徳寺前で道が三本に分かれる辻に出る。ここに板の木が植えてあり、その下に立派な庚申塔が建っている。四角型の台石正面に「右日光道、左湯之沢、三夜沢」右側面に「寛政十二年寄進当村中」左側面には「願主」と刻まれ、願主として関係者数十人の氏名が記されている。注意してみると、北爪、河原などという室沢に多い姓が多く見られる。この台石の上には、九一センチ、五四・五センチの塔身に庚申とある。庚申信仰で建立の際に、旅人の交通安全祈願を兼ねて建てたものであろう。「右日光道」とあるので、この道が昔日光へ行く近道であったと思われる。その奥にもう一つ道しるべが見られる。五〇センチほどの四角柱に「東板橋、神梅、日光」「南月田、馬場、大胡、伊勢崎」「西瀧沢、三夜沢、湯の沢」北側面に「柏川村青年会室澤支部建立」とあり、往來のはげしいこのところに寛政十二年の道しるべにならって建てたものであろう。建立年記が入っていないが、恐らく大正期から昭和初期と思われる。も



庚申塔兼道しるべ (全徳寺前)

のようなこつけない庚申塔で、右側面に「寛政六年」の建立とある。台石にははつきりときれいな文字で「右日光、左三夜澤、湯澤」と刻まれている。大胡道は板の木の東

4 室沢宿から神梅宿へ

15 124 123	弁戈天 御蔵屋敷跡 赤城塔 叶屋の蔵
	南北朝期
	現在石川房司氏所有 吉田賢雄氏所有 倉本忠雄氏所有

折願を兼ねて建てたものであろう。信仰で建立の際に、旅人の交通安全祈願を兼ねて建てたものであろう。昔日光へ行く近道であったと思われる。その奥にもう一つ道しるべが見られる。五〇センチほどの四角柱に「東板橋、神梅、日光」「南月田、馬場、大胡、伊勢崎」「西瀧沢、三夜沢、湯の沢」北側面に「柏川村青年会室澤支部建立」とあり、往來のはげしいこのところに寛政十二年の道しるべにならって建てたものであろう。建立年記が入っていないが、恐らく大正期から昭和初期と思われる。も

う一つここに道路記念碑が建っている。正面に

道路記念碑

其の昔徳川の頃ほひ此の室沢は日光街道の一宿場として夙に開けたが天然の地形に依り東方への交通には恵まれぬ点があつた。それが此の度旧日光道である県道大胡神梅線が此処に経路変更され延七百十一米、巾六米半柏川村自費工事として施工され、字境より百米を昭和三十三年十月六百十一米を翌三十四年三月起工同五月竣工した。

橋梁其他工作物を興直営一般施工は村内一般の協力に依り地元室沢民の勞力奉仕を以て延人員二千六百十五人、總工費百三十九万余円を要した。本道の開発に依り一般産業は勿論地元文化の向上に資する処蓋し大なるものである。仍て茲に之を記録し永く記念とする。

昭和三十四年十月建之

とあり、日光道（大胡道）は辻の東を通る道から現在の道に経路変更されたことがわかる。

この辻の北側に曹洞宗全徳寺がある。階段を上ると両側に多くの庚申塔や馬頭観音などが建っている。その中でも左側にある庚申塔兼道しるべは、そりとくぼみのあるおもしろい自然石に庚申の文字をくぼんだところに刻んで

側から全徳寺の東側を通り北へ進む。全徳寺を過ぎると急に上り坂となり、山道にさしかかった感じがする。一〇〇メートルほど進むと左手に村社八雲神社が見られ、高さ三・五メートルほどの立派な一對の菅束壇がある。安政二（一八五五）年の建立で、裏面には「信州高遠領中村石工北山駒太郎」と刻まれ、信州高遠石工の作品とわかる。

神社のすぐ裏に不動尊入口の案内板が建っている。教えるままに一〇〇メートルほど進むと左手に昨年十二月に建てられた銅ふきの「室沢願成就不動尊本殿」が見られる。

神社を過ぎると左右に桑畑と雑木畑が広がってくる。このあたりはすつかり民家が少なくなり左手に数戸が散在している程度である。やがて左へ右へカーブして上りつめると、右手に眺望が開け、一〇〇メートルほどで十字路に出る。でる左手に農業構造改善事業竣工記念の碑、昭和四十六年建立が



滝沢不動の丁杭 (61丁目)



坂橋十字路北の墓地内にある庚申塔群に見える如意輪観音



鍋沢橋東の十字路

建っている。このあたりは北に赤城

山、南に船川村月田・赤堀村遠く伊勢崎方面を見ることができ

十字路を横断するとゆるやかな下り坂となり、左にカーブしながら三

〇〇メートル近くで鬼川を渡り新里村に入る。入ると左手には棚田と桑畑、右手に雑木林が見られる。一〇〇メートルほど上ると左手に「新里村指定重要文化財（昭和四十六年指定）の赤城の百足鳥居」が建っている。赤城南参道の鳥居として天明二（一七七八）年に建てられた安山岩製の稲荷鳥居で高さ

四・四メートルある。さらに左手に自給飼料生産向上特別対策事業新里村板橋簡農機械利用組合のファインスタアの巨大な建物が、右手下に豚飼育場が見られる。ここから大胡道は東へや下り、右にカーブすると五差路になる。この五差路から右手（南）へ入る二メートル足らずのじやり道を一〇〇メートルほど進むと左側で桑畑と竹林の境に高さ九〇センチほどの滝沢不動の丁杭六十一丁目の石塔（天明八（一七八八）年建立）が見られる。新里村関の龍興寺第二世尊盛は寺から不動様までの間に丁杭を設置したと言われる。

この丁杭は不動様から六十一丁目である。

五差路から大胡道はゆるやかな上り道となる。五〇〇メートルほど進むとクラック式の十字路にでる。この十字路を左手（北）に入

って五〇メートル近く行くと左手に墓地がある。この墓地の北辺には庚申塔群が見られ、恐らく数は三〇基余りある。その北すみに解説難解な文字であるためはつきりしない

が道祖神らしい石塔で道しるべになつてゐるものがある。「左ふかさわ」「右かさわか」と刻まれてゐる。「ふかさわ」とは上神海の中に字としてでてくるところから、この道しるべは南のクランク式十字路にあつたものをこの墓地に移動したと思われる。この道しるべの左側には高さ一・六メートルほどの彫りのきれいな如意輪観音(安永五(一七七六)年建立)や享保八(一七二三年)建立と古い奉納板東秩父西国願礼供養塔が目につく。

この十字路から二五〇メートルほど上ると右に青木商店、正面に上電バスの上板橋停留所のある広い丁字路にでる。大胡道は右手に進み、左手にカーブして急な下り坂になる。三〇〇メートル下つて鍋沢橋を渡るとまた上り道となる。橋から一〇〇メートルほどで丁字路にでる。右手電柱の下に小さな道しるべがひっそりと建つてゐる。「南関・山上」「西至沢・馬場」「北高泉・神梅」と刻まれ、昭和二二(一九三七)年建立とある。この十字路を左折し北へ進む。左折すると右手に新里村広域簡易水道第一ポンプ場の建物を見て、左に右にカーブする上り道になる。右に山、左に棚田が見られ、急に山道にさしかかつた感じがする。十字路から二〇〇メートル近く進むと正面に山を切り開いてつくつた畑が現われてくる。大胡道はここから舗装道路と分かれ、右手の二メートル余りのじやり道となる。五〇メートルほど上ると右に入る山道となる。木の枝やしがの道をつきいで歩きにくいのはつきりと道が残つてゐる。三〇〇メートルほど山道を上ると赤城カートランドに至る舗装道路にでる。ここを横切ると、道幅二メートルほどのじやりの下り道となる。五〇メートル近く下ると左手の桑畑のすみに明治三七(一九〇四)年の馬頭観音、少し離れて頭の欠けた地藏尊(年記なし)が建つ。左手奥に大きな酪農農家が見られるがまわりは桑畑が広がつてゐる。ここから大胡道は両側の畑面より一メートルほど低いところを走るので見晴しがあまりよくない。やがて二〇〇メートルほどで県道にでる。

県道にでるとすぐ山を切り開いた道幅四メートルほどの下り道になり、高



高泉の庚申塔兼道しるべ



高泉地区の旧道



高泉の不動明王

泉集落の民家が現われてくる。県道にでたところから二〇〇メートル近く下ると左手の防火水そうの前に屋根のついたブロックの小さな小屋の中に安置された不動明王が見られる。

高さ六五センチほどの小さなもので建立は古く享保二(一七一七)年とある。ここから左に右に曲つて六〇〇メートル余り高泉集落内を下ると右手に大きなビニールハウスが現われてくる。ハウスの手前が丁字路になつて、右手の角に一メートル余りの庚申塔兼道しるべ(文化元(一八〇四)年建立)が

建っている。よく見ると台石に「右おうご、まいはし」とあり、日光方面からの旅人に教えた道しるべとなっている。

大胡道はこの庚申塔からハウスの北の県道を二〇〇メートルほど上りミラーのころを県道から分かれて右折する。右手下にさきほどのビニールハウス、左手に桑畑、正面に小高い丘が見えてくる。左手の桑畑の中にはまわりを見わたすように四メートル近い大きな宝篋印塔（明治三五（一九〇二）年建立）と寛政一（一七九九）年建立の大日様が建っている。右折して二〇〇メートルほどで大きな松のある小高い丘の前になる。この丘は日光裏街道（大胡道）の室沢宿と神梅宿の中間にあり、休み場として旅人が一息入れたところだと言われている。丘のふもとには地藏尊（年記なし）、馬頭観音などが十基見られる。中でも寛政五（一七九三）年建立の如意輪観音は彫りのきれいなものである。またすぐ左隣にある小さな石鐘（寛政七（一七九五）年建立）は注意して見ると、道しるべになっていて、「右山みち」「左おうご、まえはし」と刻まれ、「山みち」はここから山みちとなって神梅や日光方面を教えている。もとの位置は丘の前あたりにあったと思われる。

小高い丘の前を左にカーブして二〇メートルほどでミラーと電柱の間の山道が大胡道となる。一メートル余りの山道で木の枝やしのが伸びて歩行ににくいがはっきりと旧道が残っている。この山道を二〇〇メートルほど上ると左手に防火水そうがあり、すぐ県道にでる。横切ってまた山道となる。上り口に松の枝が置かれて入口をふさがれているが尾根づたいにはっきり旧道が残されている。入口から三〇〇メートル余り上ると県道にでる。でる手前右手の高いところに安水二（一七七三）年建立の石祠がひっそりと建っている。注意して見ないと見逃してしまいうである。

県道にて二〇〇メートルほど上ると、左手に赤城ロマンダ別荘地と書かれた大きな塔が見える。大胡道はこのところを入り上り道を三〇〇メートルほど行くと、右手に折れる狭い道にでる。大胡道はここを右折し、五〇メー

トルほど先を左折して畑のあぜ道を二〇〇メートルほど進むと松林になる。この林の中を一キロ余り下ると上神梅集落が見えてくる。やがて滝ノ沢の橋を渡って二〇〇メートルほど進むと左手から上ってくる道を横切り、民家の裏を真直ぐ下っていく。横切ってから一〇〇メートルほど下り左折すると左手に深沢川の水を上げていく大間々用水の流れている石垣が見えてくる。このあたりの道は二メートルほどのじゃり道で、杉林の中を走っている。今でも小学生の通学路に利用されるなど往来が多いと地元の高老が話してくれた。

やがて、右手に眺望が開け、正面に渡良瀬川左岸の山々が現われてくる。民家の裏を下ってから四〇〇メートルほどで神梅宿下宿の家並にでる。左手に下をコンクリートで固めた安水三（一七七四）年建立の庚申塔が見られる。五〇メートルほど右に左に曲って進むと神梅宿を通る足尾銅山街道に下宿で合流する。

下宿に入って、四〇〇メートルほど進むと左手の大間々笠懸土水道神梅ボンプ場前に十基の庚申塔群が見られる。一基は文政五（一八二二）年建立であとは年記なし。文化九（一八一二）年と文政六（一八二二）年建立の馬頭観音も見られる。ここから五メートルほど北には、前列に文政一三（一八三〇）年の庚申塔、天保二（一八四一）年の道祖神、後列南側より宝曆二（一七五二）年の地藏尊、元文五（一七四〇）年の青面金剛塔、文政五（一八二二）年の二十二夜塔、明和六（一七六九）年の二十三夜塔が建っている。二十二夜・二十三夜塔はともに二メートル近い像塔で彫りが大変きれいだである。ここから三〇メートルほど先の深沢公民館前には庚申塔二基が建つ。一基は大変古く寛文二（一六七二）年建立で、月日にわたり猿の像を浮き彫りにした珍しいものである。もう一基は万延元（一八六〇）年建立の二メートル余りある立派なものである。

神梅宿は室沢宿同様にだからした上り坂はいかにも宿場を感じさせる

III 日光への協住遷の現状と文化財

No	名称	年号	備考
115	庚申塔兼道しるべ 道しるべ	寛政二二年 な 昭和三四年	船川村青年会室澤支部建之
117	曹洞宗全輝寺 六道能神地蔵 庚申塔兼道しるべ 道祖神 放是審主菩薩菩提心 庚申塔	な し 寛政 六年 天保 三年 宝暦 二年 寛政 二年 寛政 六年 文政 一年 弘化 三年 安政 七年 万延元年 享保 九年 享保 一〇年 安永 五年 寛政 四年 安政 二年	
118	青面金剛塔 馬頭観音菩薩 馬頭観音大士 八雲神社の常夜燈 二十一夜塔 峰屋敷数趾 記念の碑	昭和四六年	他に庚申塔や馬頭観音数基見られる 信州高遠石工の作

4 室沢宿から神橋宿へ

が、八〇メートルほどの宿の中で古い家並はほとんどなく、新しい家々ばかりが目につく。その中で、宿の北はずれに初めて古い蔵(磯田幸作氏所有)を見ることが出来る。この蔵はややくずれかかっているが昔の面影を残してくれている。この蔵のすぐ裏に庚申塔群が見られ、寛政元(一七八九)年建立の大きな塔のまわりには十基の庚申塔が置かれている。また向いの左手には自然石の上に天王宮と入った石祠(文化七(一八一〇)年建立)が見られる。

No	名称	年号	備考
131	赤城の百足鳥居	天明 二年	新里村指定重要文化財
132	滝沢不動の丁杭(六一丁目)	天明 八年	
133	庚申塔群	享保 五年 寛政 六年 寛政 一〇年 万延元年 な し	墓地北辺にあり他に多数見える
134	道しるべ	安永 五年	墓地北すみ
135	二十二夜塔(如意輪観音)	安永 五年	墓地北辺
136	百番供養塔	宝暦 一二年 安永 八年	
137	奉納坂東秩父西国願礼 道しるべ	享保 八年	
138	長者塚古墳	昭和 一二年	
139	地蔵菩薩	古墳時代後	横穴式で両袖型石室を有する
140	馬頭観音	な し	頭部欠落
141	不動明王	明治 三七年	
142	庚申塔兼道しるべ	享保 二年 文化元年	
143	宝篋印塔	文化元年	
144	大日様	明治 三五年	桑畑の中にある。
145	地蔵尊	寛政 一二年	
146	馬頭観音二基	な し	頭部欠落
147	百番供養塔	一基が文化 一 二年	
148	如意輪観音	宝暦 四年 寛政 四年	
149	石幢	寛政 五年	
150	大黒天	寛政 七年 元治元年	白石が道しるべ
151	石祠	文政 八年 安永 二年	

146 16	144	143 142	
石 庚申塔 祠	庚申塔 馬頭観音 道祖神 地蔵尊 曹面金剛塔 二十三夜塔 二十一夜塔 庚申塔	庚申塔 庚申塔 文政二年 文政三年 文政六年 文政九年 文化五年	安永三年 文政五年 文化九年 文政六年 文政二年 天保二年 宝曆二年 元文五年 文政五年 明和六年 寛文二年 万延元年 寛政元年 文化七年
			あとの数基は年記なし 像塔 他十基年記なし 琴平神社入口

三、根 利 道

1 大原宿から根利集落へ

会津裏街道と呼ばれるこの街道は、沼田から会津へ通じる会津街道と大間々、日光方面とを結ぶ脇往還であった。この地方では一般に「大間々街道」と呼ばれている。

会津街道の宿場であった大原は慶長五（一六〇〇）年に沼田城主であった真田信幸が宿割りをして作ったもので、大原新町とも呼ばれた。この地方が沼田藩領であった時代は沼田との結びつきが強かったが、天領になってからは勢多、大間々方面との結びつきが深くなっていった。

大原宿から島古井へ出る道は、高山彦九郎の「北上旅中日記」によれば、土橋で片品川を渡ったとあるが、この土橋は現在の島古井橋とほぼ同じ位置と考えられるが、蘭原ダムが出来る前はおそらくもつと下にあつたと思われる。明和八（一七七二）年に地元三カ町村でこの土橋をかけかえた時の記録



大橋の古い民家

だ大橋を通る道は、地元大橋の人だけでなく、街道を往来する人にも多く利用されたと考えられる。利根片品方面と大間々方面との交流は会津や東入からの割板などの材木類、米、本物、藪などの物資だけでなく、追貝村では男が大間々へ日雇稼に出かけたという記録（天保九年）も残っている。（利根村誌）この道は、幕末に追貝の星野武左衛門という人が私財を投じて開いた後、明治初期に地元の関係町村によって大改修がなされている。



大橋～穴原に至る老神温泉
対岸の旧道

の右脇を通過して山道を少し上ると尾根づたいの道に出る。一方、時代的には新しいが栗原川を二回渡るだけで、片品川を渡らずにすんだ大橋を渡る道は、

には長さ十間、幅五尺とある。最近、新しい橋が出来るまでは片品川の深い溪谷を越すために鉄のロープを張り、ゴンドラで人や荷物を渡していたのである。島古井は戸数十戸足らずの小さな集落である。村のはずれを左に折れて少し行くと天満宮がある。その入口には馬頭観音像などがある。天満宮

大橋には現在でも古い作りの家が何軒か残っている。また、旧道沿いの子供広場の脇には文政八（一八二五）年の双体道祖神ミチノコノカミがあり、正月十四日の「どんどん焼き」は今でも盛大に行なわれているそうである。大橋の集落を出て老神温泉の対岸を行く道は一部通行不能の所もあるが、断崖をぬって東明館の脇に出てくる。昔は、このあたりにはまだ旅館はなく、旧道は東明館と太陽ホテルの所を通っていた。ここを内菜と呼んでいた。太陽ホテルの敷地内には「内菜の板」俗に、「おせん板」「見返りの板」とも呼ばれる樹令五百年に及ぶといわれる古い板がある。「おせん板」と呼ぶのはここに昔、茶店があつて、そこに美人のおせんという女がいたのでこの名がついたということである。また、同ホテルには古い松もあり、街道の目印になったと考えられる。この板を見て少し山道を上ると、間もなく「大夫落し」と呼ばれる難所にさしかかる。林道にある赤沢隧道の真上あたりがそうである。そこから赤沢を渡って少し上ると島古井からの道に合流する。

老神温泉は高山彦九郎が大原への途中入湯し「北上旅中日記」にそのいわれを次のように書いている。「水辺に温泉あり。赤城の湯と号す、予も入りける。赤城の神軍し玉ひし時に御足痛み玉ひ、流れに添ふて岩上に御馬を立て暫シテミ給ひ、御手に持れし箭の根にて前なる岩を穿ち玉へハ温泉忽ち湧出して入らせ玉ふに御足の疵愈へ玉ふ、其ノ時に踏しめ玉ひし神足の跡として今にあり、馬足もまた多くありける」として切紙やかき、腰痛によく効いたといわれる。

島古井から来る道と老神から来る道がぶつかる三差路からは旧状をよくとどめている道を上って行く。三差路から少し上った道の左端に木で出来た小さな祠がある。これは山神を祭った十二様である。これから先は一部林道によつて寸断されているが道形はよく確認することができる。尾根から下りて林道の右側の沢に沿つて道があるが、やや道の状態は悪い。沢を登りきると林道にぶつかり、間もなく右へ大きく迂回して弁天池の所へ出てくる。池



老神～穴原に至る旧道



穴原三面観音像
(台座が道しるべになっている)

のすぐ脇にも祠のようなものがあるが、これも十二様トウゴロと思われ。林道をまっすぐ穴原集落の方へ行く途中、右角に享和二（一八〇二）年の馬頭観音像と道祖神がある。そのすぐ先には武尊神社がある。また、穴原集落の入口右側の墓地には幕末、新徴組組長であった刺客中沢貞祇ナカノの墓がある。

林道を横切り、小林守氏の家の前を斜めに入っていく牧場への道は二〇〇メートルほど進むと道の左端に金網に入った石仏がある。地元の人はこちらを三面観音と呼んでいる。三面というのは、正面が馬頭、右側面が青面金剛、左側面が道祖神とそれぞれ違った顔が彫られているのである。台座の正面には「右大ま、道、左山みち」とあり、この街道筋では貴重な道標になっている。大原方面から来た人たちが山道と間違わないように穴原の村人によつて建立されたものである。側面には宝曆三（一七五三）年の銘がある。

道標から五〇メートル行くと右側の林の中を沢へ下りていき、沢を渡って



コムギ峠から穴原集落をのぞむ (左側の白い道が旧道)

間もなく旧道の左側に明治二三年の馬頭観音がある。そこからしばらく進むと山道を横切り、松や杉の生えた尾根にとりつく。この尾根道は遠くはコムギ峠をながめながら登っていく。このあたりは現在でも穴原の水源地まで行く道なので整備されており、かなり歩きやすくなっている。水源地は清水がかなり豊富に湧き出ている。水源地からはブナなどの灌木林の中をくねりながら急な上り坂となり、やがて林道にぶつかる。林道工事のため旧道は一部なくなってしまう。峠にたどりつくすぐ手前の道左に馬頭観音がある。文久三(一八六三)年に平川村の人によって建立されたものである。片品方面との物資の交流を物語る一つの例といえる。現在は切り開いた林道が峠まで伸びているので、この馬頭も少し高い所にあるため見逃してしまいそうである。この林道工事のために峠付近の様子もだいぶ変わってしまった。

この峠は通常「コムギ峠」と呼ばれ、小麦峠、小吹峠、小逢峠などと書かれた。昔、ある時に子供を背中に背負っていたが大風が吹いて、子供もがれて行方不明になってしまった。子供をもくような強い風が吹いたのでここをコムギ峠と呼んだのだという。眺望がきわめてよく、千メートルを越す標高でもあることから想像できる話である。しかし、南側は雑木林にさえぎられほとんど見通しがきかない。高山彦九郎が大原への途次、遠くに小出屋峠を眺めたというが時の流へを感じさせる。峠の近くに塔の平と呼ばれる所がある。ここは昔、上杉謙信の家臣が

穴原に落ちのびようとして切腹した場所と伝えられており、備前長船の刀剣や矢尻などが出土した。峠からはほぼ真すぐ南へ小沢沿いに下っていくわけだが、この道ははつきり確認できなかった。以前の道を通った人の話では、その途中に鍋こわしの十二様といものがあつたそうである。途中からは林道にぶつかり、小沢沢を何回か渡つたりしながら下つてくると小沢沢と分かれ、東へしばらく行くと大沢沢のえん堤に出る。そこからすぐに菅平からの林道に合流し根利川沿いに出る。小さな沢を渡つてすぐに左へ人家の裏手を入つていき、水害前は根利川の対岸を迂回して再び林道に出ていたが、現在は河川敷になつてしまつている。金久保橋の所を北へ少しまわつて倉見川を渡る。小林商店の前に出る。ここを新地川に沿つて直進すると、右に赤城神社、正覚寺(現在は根利公民館の一部になつている)がある。この道が日光裏街道と呼ばれた旧道である。日光裏街道は沼田往還とも呼ばれ、沼田から下久屋、貝野瀬、生越、青木、日影南郷を通つて根利に出、さらに根利牧場に通じる林道にほぼ並行して家のくし峠を越えて勢多郡東村の小中に通じていた。小中は足尾銅山街道が通つており、利根、沼田地方の人々は金精越え(明治六年以後)が出来る以前はこの道を利用して、古峠ヶ原へ参詣したり、日光例祭時の助郷などの人が往來したのである。「利根村誌」などには「從是右、日光道、左ハやま道」と書かれた享保十三(一七二八)年の道標が記されているが、残念ながら今回の調査では確認できなかった。

先程の小林商店の前を右に折れ宇都野橋を渡ると根利の中心に出た。根利は会津裏街道と日光裏街道の交点にあたり人馬の往來にぎわい、宿場の様相を呈していた。山村の静かな集落であるが、高山彦九郎が根利を訪れた天明五(一七八五)年には戸数約百戸であつたという。根利と街道との結びつきがいくかに強いのは、最近まで根利の人々の婚姻圏は沼田方面よりも勢多郡方面の方が多かつたことや、物資の買い出しなども大間々に出ることの方が

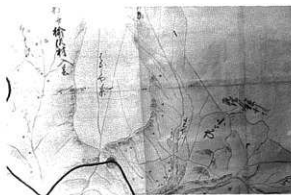
158	馬頭観音文字塔	明治二十三年	
159	塔の平	文久三年	コムギ峠
160	正覚寺		コムギ峠
161	問屋跡		庚申文字塔（寛政十二年）他
162	奇應旅館		薬の調合器具などの資料

2 根利集落から寒戸集落へ

中村屋の所を左に折れ道がカーブする右角に自然石の大きな庚申塔がある。さらにそのすぐ裏に大きな地藏菩薩が見えるが、ここが奇応丸の小林家の墓地である。この大きな地藏尊は信州伊那の石工松沢源八らによって寛政九（一七九七）年に作られたものである。それと並んで千部供養の大きな塔がある。文政五（一八二三）年に建立されたもので、正面の見事な書体は片品戸倉の著名な書家であった萩原賢和の手になるものである。これらからも奇応丸の繁栄ぶりをうかがい知ることができよう。



根利小林家墓地にある地藏尊



貞享四年の繪沢村絵図（小村峠付近）



根利～寒戸（寒戸馬頭村近の旧道）

二又沢を渡った正面は現在、菅林署の機械化センターになっている。旧道は橋の手前を右手に山道を上っていく。この二又沢はカスリン台風の時には大変荒れ狂った場所であつた多くの人家をのみ込んでしまったが、現在では大きなえん堤が作られその心配もなくなった。二又沢に沿うように上っていくが、途中、道はかなり荒れている所もある。特に雨の時などは川のようになってしまうため歩くのも困難である。旧道が右へ大きくカーブするあたりに昔は茶店のようなものがあつて旅人などが立ち寄つたという。高山彦九郎が立ち寄つて濁り酒を飲んだという伊助の所というのはこの茶店ではないかと思われる。沢沿いに行くとやがて果道にぶつかるが、旧道はそのまま沢の左を峠へ向かつて上っていく。コデヤ峠の付近は懸崖などによって様子がだいぶ変わつている。しかし、頂上付近と思われ所に大きな橋の木の下の根利村の人たちが寛政九（一七九七）年に作つた十二山神の石祠があるので、おそらく旧道はその近くを通つていたと考えてよい。

天気によれば北には利根の山々、西には赤城黒檜山がよくのぞめる所である。

コデヤ峠は地元ではコジヤと呼び小蛇という字をあてている。下コデヤと上コデヤからなり、風が強く通行に大変苦労

した所である。その名の由来は、昔ある時に大風のためにコモギ峠でわが子を吹き飛ばされて、落胆してとほとと峠を下っていく途中に、捨子がいたのでもこれを拾って山を下って雷を払ってみたら、わが子だったので「わが子じゃなあ」といったのでついたという伝説がある。そして、わが子と出合った所を今でも「こであい」と呼んでいる。

峠を下っていく右手奥に花見ヶ原という平坦地がある。現在この一帯はキャンプ場になっていて、ここから黒檜山頂まではあとわずかである。昔はこの付近を龍が袖とか龍がそりといったことが『北上旅中日記』に書かれている。

峠を下ってきた道は間もなく県道と合流し、右に入る花見ヶ原キャンプ場入口から三〇メートルくらい県道を下った右側に大きな松の生えている所がある。ここから沢へ下っていく道が旧道で、小黒川を渡るあたりは道形がはっきりしないが、沢を渡ってキャンプ場へ行く林道の左下をほぼ並行して進んでいく。林道が大きくカーブするあたりで旧道は林道を横切って、今度は左下を流れる寒戸川の沢筋へと下っていく。ちょうど林道と旧道がぶつかるあたりに安永四（二七七五）年の道祖神が林道脇の右側に建っている。林道が出来る前はもう少し山の上の旧道沿いにあったものである。

旧道はつづら折りに高圧線を左に見ながら林の中を下っていく。寒戸川にぶつかるとあたりで若下沢三号ダムの所へ出る。ダムまでは妻久保から林道が入っていて、旧道は林道とほぼ重なっている。寒戸川を渡って間もなくすると、左側に杉が植えてあるが少し平らな所がある。ここに街道の往來が盛んな頃は三〜四軒くらいの家があったそうだが、現在はみんな下へおりてしまった。屋根稲藁だけが現在も残っている。ちょうどこの屋根跡あたりから右へ上っていく山道が寛享四年以前に使っていたといわれる会津眞街道である。地元の人々の話では山を越えて赤城登山口の二の鳥居の方へ出ていった道で、今回調査した本街道よりも右側でかなり高い所を通っていたそうである。



根利～寒戸に至る旧道脇にある馬頭観音

先程の所から林道を下っていくと右側の少し小高い所に旧道が一部残っている。この旧道を進むと林の左側に形の整ったきれいな馬頭観音が二体ある。天



寒戸を通る旧道

んと残されていない。また、小林昌次郎氏の馬宿をしていた面影をとどめている。

保四（一八三三）年と安政六（一八五九）年に作られたもので、街道の往來が盛んな頃をしのぶことができる。馬頭観音のすぐ先で再び林道に出て三〇メートルくらい行くと沢を渡る手前の右側に庚申塔があるが、年代不明である。そこから橋を渡って左へ折れると寒戸の集落がある。昔はかなり人家もあつたが、現在は星野家と小林家の二軒だけである。星野茂治氏の家は昔、本陣をしていたが、土蔵も長屋門も母屋もすべて火事で消失してしまい、資料はほと



麦久保の馬頭観音

ようど会向いに明治三十五年（一九〇二）年の馬頭観音がある。分枝跡（現在は検沢雨量観測所になっている）の脇を右へカーブしての間もなく少し平らな所に出る。ここに石造物が

寒戸から麦久保に向かう道は林道と重なり舗装されている。カーブミラーのある所から右へ入る道が旧道で、旧状をよくとどめている。旧道に入ってから少し下った左側の杉林になっている、やや平坦地に「亀田屋」と呼ばれる二階建ての旅籠屋が戦前まであった。瀬谷さんという人が経営していたのである。旅籠跡のち

3 寒戸集落から柏山集落へ

No.	名称	年号	備考
164	庚申文字塔 地藏跡菩薩像	万延元年 寛政九年	根利小林家墓地、千部供養塔（文政五年） 根利 コヂヤ峠 寒戸
165	立場跡	寛政九年	
166	十二山神石祠 道祖神文字塔 馬頭観音像	安永 四年 天保 四年 安政 六年	
167	立場跡	寛政九年	
168	道祖神文字塔 馬頭観音像	安永 四年 天保 四年 安政 六年	
169	庚申文字塔 本陣跡	年代不明	

2 根利集落から寒戸集落へ



麦久保の立場跡

馬のふすまやうどんなどを扱っていた。この立場のあたりには人家が数軒あったが、現在は新井一郎氏の家が残っている。新井さんの前を沢へ下っていくと、沢によつかる手

何基かまよっている。十二山神の石祠や庚申塔などと一緒に馬頭観音像が三基ある。天明二（一七八二）年と文化四（一八〇七）年、安政六（一八五九）年のものでいづれも整った形をしている。昔からの場所にあったという話であるが、何故一カ所にこんなまよってあるのか定かではない。そこから少し下った所に一軒家がある。星野治郎氏の裏を通って沢を渡り山を上っていく。この沢は現在水量はあまりないが、昔はかなりの水量があつて星野さんの家では水車を回わしていたそうである。星野さんの真裏で旧道の右側、大きな石がある平地に昔、立場があつて馬のえさやまんじゅうなどを売っていたそうだが、昭和二十二年の台風で流失してしまつた。

かなり急な山道を上りつめると大きな松が沢山生えている平棚と呼ばれる平地に出る。昔の旅人などもここで一服したに違いない。平棚から左へ折れ少し下った所の櫛の太木の下に十二山神の石祠がある。延享元（一七五四）年高僧の新井利左衛門によつて建てられたものである。この少し先から道はかなり急な下りになる。道形ははつきりしているが、雑木などが投げこまれていて通行困難である。山を下った所に立場があつた。現在は下の高櫛へ出てしまつたが、旧道の往來が盛んな頃までここに屋敷があつた新井寿久郎氏の家がそれである。馬のふすまやうどんなどを扱っていた。この立場のあたりには人家が数軒あったが、現在は新井一郎氏の家が残っている。新井さんの前を沢へ下っていくと、沢によつかる手

前左側の木立の中に稲荷の石祠が残っている。ここで昔、小林寅蔵さんの家が立場をやっていた。現在この家も外へ出てしまった。

えん堤のすぐ下あたりで沢を渡り高橋川の対岸に出る。このあたりは沢筋が崩れてしまっでよくなる所もある。山道を少し上ると間もなく三差路になる。左の道を行けば高橋集落へ出られる。この途中、左側の少し高い所に宝曆四（一七五四）年に高橋村の新井金七によって作られた十二山神がある。したがってこの道もかなり古い道と考えてよい。本道は三差路をほぼまっすぐ下っていく。旧道が県道に合流する少し手前右側に県道側を向いて道祖神が建っている。文化七（一八一〇）年に鹿角村の新井勇右衛門という人が建てたものである。現在、県道は橋の新設工事をしてているが、旧道は県道と重なるって鹿角川を渡るほどなく鹿角の集落に出る。

現在の県道は鹿角の集落の脇をほぼ直線的に走っているが、旧道は右に入る曲りくねった道で集落のほぼ真ん中を通っている。旧道に入っていくと右側の石垣の上に土蔵だけが残る屋敷跡がある。これが鹿角で「間屋」と呼ばれていた新井家である。生糸の仲買いをしていたので糸間屋と呼ばれている。この新井家に養子に入ったのが水沼製糸工場の創設者星野長太郎の弟領一郎であった。兄の命令により領一郎は渡米してしまつたため、その後はさびれてしまつた。現在は土蔵だけが残っており、アメリカンスタールの夏季キャンプなどに使用されている。また、領一郎の孫にあたるライシャワ夫人のハルさんが、ここに一時疎開していたことがある。

旧道は鹿寺跡にぶつかる。このつきあたりには寛政七（一七九五）年の十二夜塔や文化八（一八一一年）の背面金剛像など沢山の石造物がある。また、鹿角には茅葺きの屋根はもうほとんど見られないが、屋根の形はそのまま



高橋～鹿角の旧道脇にある道祖神



柏山地蔵堂の中にある馬頭背面金剛像



鹿角旧道入口と間屋跡の土蔵

まの古い大きな民家が沢山残されている。

出て、坂を上りつめた所に赤城一の鳥居があった。現在、その柱の一部が県道の右側の藪の中に残っている。そこから右に入っていく道が赤城登山口で利平茶屋から鳥居峠までケーブルカーが運行していた時代は多くの登山客でにぎわった。県道が沢を渡る手前左側に芭蕉句碑がある。この街道筋では唯一のものである。碑面には「山路来て何やら床し寿みれ草」と刻まれており、文久二（一八六二）年に建てられたものである。

ここからは県道とほぼ一致している。坂を少し下った右側に小さなガソリンスタンドがある。そのすぐ脇に小さなお堂が建っている。中には地藏菩薩の座像と千手観音像が並んでいる。これは元はもう少し下の方にあったも

のだという。地藏の方は年代はわからないが尾池住夫氏の先祖が作ったものだという。信仰がたえないのか今でもきれいな赤い布がかかっている。もう一つの千手観音には馬頭がついていて、弘化三（一八四六）年に村中の人たちによって建てられたものである。

水口屋商店の角を左折すると間もなく左手の小高い林の中に愛宕神社があり、沢山の庚申塔が並んでいる。県道をさらに下った右側の杉林の中に虚空蔵菩薩が祭られているお堂がある。これは尾池家の先祖が子供を相次いでなくした時に虚空蔵様が夢枕に現われたので、それを祭ってやった所、以後子供が無事に育つたという言い伝えが残っている。ここには弘化三年の馬頭観音や、年代はわからないが、双体道祖神や石造不動明王像がある。またこの平坦地には、昔、源平茶屋というのがあって、赤城へ行く人などが立ち寄ったという。国定忠治もその一人であると伝えられるが定かではない。この虚空蔵様のすぐ前にある大きな家が、通称「大笠」と呼ばれる尾池住夫氏の家である。先祖は名主をしていたこともある旧家である。柏山でもひとときわ目につく大きな母屋にその風格がうかがえる。この家では今でも昔ながらの民俗的にも価値のある行事をきちんと行っているようである。



〔柏山宿に残る家並み〕

このあたりを一般に柏山と呼ぶが、江戸時代には檜山という字をあてている通り、昔は檜の木が沢山生えていたという話である。高山彦九郎は大原への途次、天明五（一七八五）年の七月十三日と同十七日の二泊檜山の孫兵衛という者の所へ泊っているが、どの家か定かではない。ここは根利と大間々の中継地として近年まで大いに栄えた。旧道の往来盛んなりし頃は柏山ではほとんどの家が馬方（今の運送業）をしていたという。ここでは旧道を普通、根利街道と呼び、字名をとって西原往還と呼んだりしていた。根利からは主に薪炭が下ってきた。そして、その炭俵は柏山の人が作ったそうだ。大間々に市が立つ二・七日にはこの街道を利用して味噌などの食料品を買い出しに行った。

「大笠」から県道を少し下ると、左側に土蔵のある大きな家が「間屋」と呼ばれた尾池徳三郎氏の家である。この家は祖父の宗助の代に炭間屋をして巨大な富を築き、その子紋兵衛の代まで根利から薪炭を運び大間々方面へ輸送していた。現在は屋敷の様子もだいぶ変わってしまったが、全盛期には七棟の建物があつたという。今は母屋と土蔵を残すのみである。母屋はほぼその頃のままだが、県道が拡がる前は間口が十間半もあって、奥行も五間半もあって道に面した所が店になっていた。炭間屋をしていた頃は、炭を貯蔵しておく倉庫が二棟もあって、多い時は一万俵近くが取り扱われたという話である。毎日十人前後の馬方が根利との間を往復したという。馬方は早朝に柏山を出て根利に着き、そこで馬に六〜八俵の炭を積み、自分でも一〜二俵をかいで夕方にはまた柏山に戻ってきた。同様に、根利からも馬方が炭を積んでこの街道を往来した。こうした場合、根利の人はほとんどが何からのつながりやの間屋の尾池家との間に持っていたといわれ、当時「尾池の根利か根利の尾池か」とまで呼ばれた。この尾池家は一時「朝日屋」と呼ばれる旅籠をしていたこともある。しかし、残念ながら昔の資料は土蔵が戦後火災にあつたためほとんど残されていない。

3 家戸集落から柏山集落へ

No	名称	年号	備考
174	旅籠跡	明治三五年	亀田屋
173	馬頭観音文字塔	天明二年	同(安政六年)、庚申文字塔、(天明二年)
172	馬頭観音像	文化四年	同(安政六年)、庚申文字塔、(天明二年)
171	立場跡	延享元年	十二山神石祠
170	立場跡	宝曆四年	麦久保
169	立場跡	文化七年	平瀬
168	立場跡		高橋
167	立場跡		高橋
166	立場跡		高橋
165	立場跡		高橋
164	立場跡		高橋
163	立場跡		高橋
162	立場跡		高橋
161	立場跡		高橋
160	立場跡		高橋
159	立場跡		高橋
158	立場跡		高橋
157	立場跡		高橋
156	立場跡		高橋
155	立場跡		高橋
154	立場跡		高橋
153	立場跡		高橋
152	立場跡		高橋
151	立場跡		高橋
150	立場跡		高橋
149	立場跡		高橋
148	立場跡		高橋
147	立場跡		高橋
146	立場跡		高橋
145	立場跡		高橋
144	立場跡		高橋
143	立場跡		高橋
142	立場跡		高橋
141	立場跡		高橋
140	立場跡		高橋
139	立場跡		高橋
138	立場跡		高橋
137	立場跡		高橋
136	立場跡		高橋
135	立場跡		高橋
134	立場跡		高橋
133	立場跡		高橋
132	立場跡		高橋
131	立場跡		高橋
130	立場跡		高橋
129	立場跡		高橋
128	立場跡		高橋
127	立場跡		高橋
126	立場跡		高橋
125	立場跡		高橋
124	立場跡		高橋
123	立場跡		高橋
122	立場跡		高橋
121	立場跡		高橋
120	立場跡		高橋
119	立場跡		高橋
118	立場跡		高橋
117	立場跡		高橋
116	立場跡		高橋
115	立場跡		高橋
114	立場跡		高橋
113	立場跡		高橋
112	立場跡		高橋
111	立場跡		高橋
110	立場跡		高橋
109	立場跡		高橋
108	立場跡		高橋
107	立場跡		高橋
106	立場跡		高橋
105	立場跡		高橋
104	立場跡		高橋
103	立場跡		高橋
102	立場跡		高橋
101	立場跡		高橋
100	立場跡		高橋
99	立場跡		高橋
98	立場跡		高橋
97	立場跡		高橋
96	立場跡		高橋
95	立場跡		高橋
94	立場跡		高橋
93	立場跡		高橋
92	立場跡		高橋
91	立場跡		高橋
90	立場跡		高橋
89	立場跡		高橋
88	立場跡		高橋
87	立場跡		高橋
86	立場跡		高橋
85	立場跡		高橋
84	立場跡		高橋
83	立場跡		高橋
82	立場跡		高橋
81	立場跡		高橋
80	立場跡		高橋
79	立場跡		高橋
78	立場跡		高橋
77	立場跡		高橋
76	立場跡		高橋
75	立場跡		高橋
74	立場跡		高橋
73	立場跡		高橋
72	立場跡		高橋
71	立場跡		高橋
70	立場跡		高橋
69	立場跡		高橋
68	立場跡		高橋
67	立場跡		高橋
66	立場跡		高橋
65	立場跡		高橋
64	立場跡		高橋
63	立場跡		高橋
62	立場跡		高橋
61	立場跡		高橋
60	立場跡		高橋
59	立場跡		高橋
58	立場跡		高橋
57	立場跡		高橋
56	立場跡		高橋
55	立場跡		高橋
54	立場跡		高橋
53	立場跡		高橋
52	立場跡		高橋
51	立場跡		高橋
50	立場跡		高橋
49	立場跡		高橋
48	立場跡		高橋
47	立場跡		高橋
46	立場跡		高橋
45	立場跡		高橋
44	立場跡		高橋
43	立場跡		高橋
42	立場跡		高橋
41	立場跡		高橋
40	立場跡		高橋
39	立場跡		高橋
38	立場跡		高橋
37	立場跡		高橋
36	立場跡		高橋
35	立場跡		高橋
34	立場跡		高橋
33	立場跡		高橋
32	立場跡		高橋
31	立場跡		高橋
30	立場跡		高橋
29	立場跡		高橋
28	立場跡		高橋
27	立場跡		高橋
26	立場跡		高橋
25	立場跡		高橋
24	立場跡		高橋
23	立場跡		高橋
22	立場跡		高橋
21	立場跡		高橋
20	立場跡		高橋
19	立場跡		高橋
18	立場跡		高橋
17	立場跡		高橋
16	立場跡		高橋
15	立場跡		高橋
14	立場跡		高橋
13	立場跡		高橋
12	立場跡		高橋
11	立場跡		高橋
10	立場跡		高橋
9	立場跡		高橋
8	立場跡		高橋
7	立場跡		高橋
6	立場跡		高橋
5	立場跡		高橋
4	立場跡		高橋
3	立場跡		高橋
2	立場跡		高橋
1	立場跡		高橋

4 柏山集落から上神梅集落へ

県道の両側に古い作りの民家が散見される柏山の集落から二〇〇メートル程左へ入った所に観音堂がある。ここには嘉永四(一八五二)年の馬頭観音や二十二夜塔などがある。

出合原へ行く道を通りすぎ県道を五〇〇メートル程行った所を打切とい

「ブチキリ」と呼んでいる。ここが赤城神社入口になっていて、現在は神社の隣が老人保養センターになっている。県道を右に入る角に昔は庚申塔や道祖神などがあつたが、現在は神社の脇に移されている。双体道祖神は安永五(一七七六)年に作られたものである。

ここを通る道はすでに「足尾銅山街道」でふれられており、足尾への道として利用されていたわけであるが、明治九年の『郡村誌』によれば、「字馬橋ノ八坂ヨリ追分ト成ル」とあつて、この道を沼田東入街道とか沼田街道とも呼んでいるのでここで再度ふれておきたい。

赤城神社下にある天保四(一八三三)年の大きな二十三夜塔を左に見て老人センターの裏をまわつて林の中を下つていくと用水堀におつかる。堀をこえて少し下ると沢におつかり、沢を渡るとはつきりした道形が残っている。この旧道を少し上りかけた途中の左側に馬頭観音(年代不明)がある。そこから少し上ると林が切れ、見晴らしのよい畑の中を旧道は通つていく。水のほとんどない深い沢を渡るとすぐに左へ折れ沢沿ひに下つていく。ここから右へ行けば出合原、沢の手前を左へいけば前田原、まっすぐ行けば川口の集落に出ることが出来る。

沢沿ひの道は近道としてかなり最近まで利用されていたので旧状をよくとどめている。一キロ程下ると人家が二軒ある。松井金作氏の家と木村博氏の家の横を旧道が通つている。舗装されているが道幅はほぼ昔のままである。このあたりを下原と呼び、昔はもつと人家もあつたが、旧道がほとんど使われなくなつたため、今では二軒だけになつてしまつた。道の右側の平地を十兵衛屋敷と呼んでいる。木村さんの屋敷には大きな山桜があり、その木の根元に寛政五(一七九三)年に先祖が建てた庚申塔がある。また、そこから一〇〇メートル程下つた所に、道の左側には文政八(一八二五)年の馬頭観音、右側にはやはり木村家の先祖が建てた文政二(一八一九)年の庚申塔がある。そこからさらに一〇〇メートルばかり下つた右側のちよつと高い所に大きな

松が生えていて、その根元に慶応四(一八六八)年の十二山神が祭られている。

曲りくねりながら下りていくと、右へ大きくカーブする所から旧道は左へ入っていく。しかし、まっすぐ下りていく舗装道もかなり古くから利用されていたようである。左折した道は一部変わっているが、水道貯水場の脇を通過して伊藤学氏の家の裏へ出てくる。このあたりが大正時代に作られた粕川水電跡である。前述した追分というのはこの辺と考えられる。上神梅の方からくと川口川にかかる馬橋を渡り、八坂と呼ばれる坂を上ると伊藤さんの家の裏あたりから二つに道が分かれて、右へほぼまっすぐ行けば現在の城下トンネルの上を通過して国道にぶつかり水沼方面に出たのが日光裏街道(いわゆる御山街道)。左へ行き坂を上っていけば沼田東入街道であった。



下原を通る旧道と木村博氏宅の山桜

山道を下って舗装道にぶつかり、そこを西へ一〇〇メートル程行くと左に

川口川に下りていく道が旧道である。川の付近は道形がよくわからないが、かなり水量の多い川を渡って対岸に出るとすぐ左手に馬頭観音像がある。安政三(一八五六)



城下川口川そばの馬頭

年に城下の金子宗右衛門という人によって建てられたもので、おそらく馬橋のすぐたもとにあつたと考えられる。このすや上に屋敷跡があり稲荷様がある。この家はわらじなどを作っていたそうである。雑木などが倒れ少し荒れている旧道を上っていくと、左側に大きな自然石がある。亀に似ているので亀の子石とか神亀石などと呼ばれている。この石を煎じて飲むと利益があるとして近郷にも知れわたっていた。ここから間もなくして県道に合流するが、このあたりはまっすぐな道で、ここから道形はよくわからない。

県道に出て、本宿から田沼村長宅あたりまでは現在の道とほぼ一致している。本宿のはずれ、村長の家の前で道は大きくカーブしている。カーブを曲りきったあたりから左に入っていくと、昭和三年に建てられた道標や、安永十一(一七八二)年の庚申塔の脇を通過して深沢川にぶつかった。えん堤のすぐ下あたりを渡って対岸に出た。ここからは旧状をよく残している。道の右側に元治二(一八六五)年の馬頭観音があり、さらにそのちようと会向かいに屋敷跡がある。ここに明治末期頃まで旅籠のようなものがあつたそうである。旧道はゆるやかに上りながら間もなく林をぬけ、上神梅の宿はずれに出る。旧道の通り出る左側に庚申塔などが数基建っているのだからやすい。上神



上神梅旧道入口にある庚申塔

III 日光への歸住還の現状と文化財

No	名称	年号	備考
189	観音堂		馬頭観音文字塔(嘉永四年)他
190	赤城神社		双体福祖神(安永五年)、二十三夜塔(天保四年)、庚申文字塔他
191	馬頭観音文字塔	年代不明	
192	庚申文字塔	寛政五年	下原
193	馬頭観音文字塔	文政八年	〃
194	庚申文字塔	文政二年	〃
195	十二山神	慶応四年	〃
196	馬頭観世音像	安政三年	城下
197	神龜石		龜の子石とも呼ぶ
198	庚申文字塔	安政十年	西国供養塔(弘化四年)他
199	馬頭観音文字塔	元治二年	上神梅
200	旅籠跡		〃

4 柏山集落から上神梅集落へ

梅は深沢宿とも呼ばれ、昔は宿の中央を堀が流れ、「恵比須屋」「大黒屋」「駕籠屋」「藤屋」などと屋号をもった家が多かった。祇園祭りなどもぎやかに行なわれたという。琴平神社の入口にある小さな天満宮の石祠が祭りの中心であった。

ここから大間々までは足尾銅山街道を利用すればあとわずかである。大原から会津裏街道を通って大間々まで約十里であった。

あとがき

群馬県歴史の道調査は、昭和五十三年度より五年計画で実施され、本年度の調査はその最終年度であり、ここに、全十七集の報告書を計画どおり発刊するはこびとなった。

調査開始当初、調査方法も定まらず摸索の内に始められたが、課内内容検討あるいは調査員の方々の意見等も取入れ、群馬県としての歴史の道報告書を編集できたと考えている。

最終年度である今年度の調査は、鎌倉街道・東山道と、これまでの近世の街道と異なる中世以前の道を調査対象としたため、これまでの調査方法では十分でなく、伝承あるいは地積図を基に、現在調査を実施するという調査方法をとらざるを得なかった。その上、鎌倉街道・東山道とも街道そのものの距離が長く、特に鎌倉街道は県内全域に伝承が分布し、各五名ずつの調査員では、県全域を調査するには手が及ばず、県南中心の調査にとどまってしまう。また、文献調査等も十分出来なかったのは残念であった。しかし、これまで鎌倉街道についての調査は、各地域の個々の調査であり、県全域を対象とした調査は本調査が最初と思われる。今後、この調査を基にさらに各地で詳細な調査がなされることを期待したい。

また、東山道については伝承も少なく調査員間でも推定路線の分かれる所もみられたが、地積図等で路線を推定し、それに基づき現地調査を実施し、より確かな推定路線を設定した。さらに、東山道は時代的にも変化していったものと思われ、官道以前、作道したもの、中世にはいつてからの東山道と三時代に大別して、それぞれのルートを推定し記述した。しかし、これらはいくまでも推定ルートであり、確定したルートではない。今後の研究により、

さらに確実なルートが設定できれば幸いである。

これまでの調査で最も調査の手が行届かなかった吾妻の諸街道については、当初計画した範囲、ルートよりさらに拡大し、しかも旧道がほとんど廃道同様の山道であり、そのため、調査員の方々は沢の様な廃道を地道に調査され、多大の苦勞をおかけしたが、現在道と並行する旧道を詳細に明らかにすることができ、さらに、これまで未調査であった多くの文化財も記録できたことは一つの成果であった。

日光の脇往還については、すでに日光への主要街道は調査済みであり、今回の調査はいわばその支道的なものであった。そのため、調査対象は大きく三街道に分かれ、その調整に苦勞した。特に根利道は、県内でも豪雪地帯の一つに挙げられる地域で調査も容易ではなかった。この道は近世においては利根郡と東毛を結ぶ重要な交通路であったが、現在は道幅も狭く、悪路の連続で交通量もわずかである。近世の街道は、現在の道よりさらに高所にわずかに道形を残すのみで、これまで未調査の街道であり、今回調査できたことは幸いであった。

以上の様に、それぞれ街道の性質も相違し困難点も異なっていたが、調査員のご努力により、それらの困難点を一つずつ克服し、各街道ともある程度明確にでき、それぞれの報告書にその成果をもち込めたと考えている。

本年度の調査で、群馬県歴史の道調査は完了するが、その成果を十七集の報告書に収録し、それぞれ街道の保存状況、文化財の存在、街道の特色等記録保存することができ、当初の調査の目的を達することができた。これも調査に携さわっていた多くの調査員の方々、また、調査に協力いただいた方々、さらに各市町村教育委員会の御除であり、改めて感謝を申し上げます。今後、この歴史の道調査が、ただ単に調査のみに終わるにとどまらず、歴史の道整備の基礎資料として各地で活用していただきたいと考えている。

日光への脳往還

印刷 昭和58年3月25日

発行 昭和58年3月31日

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

☎ 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社
